

1月 日

「備えをせよ」

エゼキエル 38 : 1-16

武安 宏樹 牧師

「備えをせよ」とは主の民にではなく、敵対する勢力の首長ゴグに対して、神がイスラエルを攻撃するように命じられたことばです。捕囚から帰還後、平和ボケに陥って神を見上げなくなった民を揺り動かすのが、その目的です。敵の備えに触発されて、主を見上げて主と共に戦う備えをさせるためです。

「備えあれば患なし」と諺にあります。備えには防衛的な意味があります。国家のみならず、私たちのライフプランやリスクマネジメントに必要なこと。では備えがあれば本当に患が全くなくなるかといえば、100%は不可能です。大震災で津波が堤防を越えて襲ってくるように、想定外はありうることです。聖書は終わりの時代に何が起こるか、期日を除いては詳細に教えています。キリスト者はいつだかわからずとも、希望をもって待ち望むことができます。平和な毎日が脅かされるような事件に直面して、怪しんではなりません。また敵を直視して一対一で戦わず、敵も主の手中にあることを覚えること。そうすれば「想定外」の事柄に振り回されたり、一喜一憂から解放されます。戦況をコーディネートされる主を見上げ、「三次元」で霊的戦いを捉えること。神に従うことが先です(ヤコ4:7)。神に沈潜してから戦うのでも遅くありません。神を見上げないことには、平安も確信も洞察も得られず、勝利できません。暗い時代の足音が聞こえる今日は、祈りと御言葉と奉仕など基本的なことに、いっそう励みましょう。一人で戦わず、共闘態勢を組むのが教会の姿です。

パウロはエペソ6章で霊的戦いについて、要点を分かりやすく解説します。一見して人や組織と争っているようで、背後で悪魔が糸を引いたりします。主の大能の力で強められ、霊的武具をフル活用し、決め手となるのは御言葉。そこに御霊の高圧電流が流され、御霊によって力づけられた祈りが必要です。私たちの側で常に行うべき「備え」は、たゆまず継続して祈りに専心すること。この時代に目を覚まして戦い続けるために、祈りの手を挙げ続けましょう。今年も皆さんで手を取り合って、キリスト中心の教会を建て上げましょう。

1月13日

「復讐とあわれみ」

エゼキエル 38:17-39-10

武安 宏樹 牧師

「備えをせよ」(38:7)はイスラエルの民でなく、敵対する勢力ゴグに対する命令ですが、ゴグ陣営を攻撃に用いられた後、神は彼らを壮絶に滅ぼします。

平和な生活から突如暗闇へ突き落とされる理不尽さは、ヨブを思わせます。私たちは身の上に次々と試練が起こると、何か罪を犯したのではないかと、不安から理由を追及しますが、自分の不足から試練を測るのは間違いです。この試練の意味は、神が彼をもっと愛したい、ご自分に近づきたいからです。だとしたら私たちの側で付け加える以前に、神が深遠な理由をお持ちです。

聖なる神が敵に発する怒りがどれほどか。あまりに壮絶で見当つきません。もはやゴグとかイスラエルとかでなく、全地を震撼させ主の聖を現されます。私たちは世の中全体に取り囲まれて敵となり、祈りの援軍がないと感じても、神の強烈な復讐が必ず来ます。それは愛であり、さばきとも表裏一体です。主に信頼して善を行う者に報酬、主に敵対して悪を行う者に報復を与えます。どちらも同じ「報い」です。すぐでなくとも必ず、最高のタイミングで来ます。詩94篇に復讐の神の内実が明らかです。それは自分に敵対する者＝悪者と決めつけ、心の傷を代行するものではありません。際限ない争いの連鎖でなく、私たちも敵も含めて汚染された、神から引き離す全地の罪に対する復讐です。いいかえれば罪を足場に神と人、人と人を敵対させるサタンへの復讐です。神は原始福音をもって復讐を宣言(創3:15)、キリストの復活で成就しました。サタンは断末魔の悪あがきをし、再臨の暁には「火の池」行が待っています。

だから私たちは雄々しく戦う一方で(エペ6:)、受けて立てばよいのです。戦いの決着はすでについているのです。復讐の神がたしかに復讐されたから、私たちは永遠のいのちをいただいています。だから恐れない。つぶやかない。たとえ私たちや主にある兄弟を死に至らしめ、教会を散らされるとしても、報いの遅延で敵が高笑いしても、すでに勝利者です。最後の復讐は間近です。その究極的な復讐こそあわれみ。私たちは孤独な敗北者に終わらないのです。

1月20日

「神との独占契約」

出エジプト 20:1-7

武安 宏樹 牧師

「わたしが自分の魂の救いと祝福とを失わないために、あらゆる偶像礼拝・魔術・迷信的な教え・諸聖人や他の被造物への呼びかけを避けて逃れるべきこと。

唯一のまことの神を正しく知り、この方のみ信頼し、謙遜と忍耐の限りを尽して、この方のみすべてのよきものを期待し、真心からこの方を愛し、畏れ敬うことです。

すなわち、わたしが、ほんのわずかでも神の御旨(みむね)に反して何かをするくらいならば、むしろすべての被造物の方(ほう)を放棄するということです。」(ハイデルベルク信仰問答 94)

本書は前半 18 章までの「救い」、後半 19 章以降の「律法・幕屋」に分かれます。この「救い→律法」の流れが重要で、十戒を守るのは救われるためではなく、救われた民がさらに恵みを知るためにあります。だから罰則が存在しません。1～4が人間から神への宗教的な、5～10が人間同士の社会的な戒めですが、意外と重要なのは前文(2節)で、まず救いありきを確認して本文に入ります。神話にしか登場しない神でも、造られた神でもなく、現在進行形の創造主が、私たちを愛し・選び・救われ、「わたし」と「あなた」の関係に入れられたのです。

第1戒は主の上に有形無形の神々を宿し、恐れてはならないということで、影響力のある人々のことばや心の傷、政府からの宗教的強制も含まれます。自分の胸に手を当てて、恐れのない人はいないでしょう。先達もそうでした。私たちは主を見上げることなしには、どうしても偶像を拝んでしまう罪人で、十戒とは私たちを戒める以上に、主体的に神と人を愛するための手引書です。喜んで守ることで成長します。主がどんなに私たちを愛しておられるか覚え、弱さを認めて祈るなら、聖霊が助け、悔い改めを導きいやしてくださいます。

第2戒で神を形にすることは、人間と同じ有限の存在に引き下ろすことで禁じられます。撤去すれば、悩むことも、人を躓かせることもありませんが、「ねたむ神」(5節)が愛の本質だから、ここに戻って祈って判断することです。神の愛に答えて、周りに妥協でなく証することを求めれば、答は導かれます。第3戒でも「命の恩人」のことを悪く言い、顔に泥を塗れないのは明らかです。愛する主の御名だから、主の祈りに「御名をあがめさせたまえ」とあるように、日ごとに、心こめて唱えましょう。主があなたを独り占めしたいのですから。

1月27日

「安息日の恵み」

出エジプト 20:8-11

武安 宏樹 牧師

「神が望んでおられることは、第一に、説教の務めと教育活動が維持されて、わたしがとりわけ安息の日には神の教会に熱心に集い、神の言葉を学び、聖礼典にあずかり、公に主に呼びかけ、キリスト教的な施しをする、ということ。

第二に、生涯のすべての日において、わたしが自分の邪悪な行いを休み、わたしの内で御霊を通して主に働いていただき、こうして永遠の安息をこの生涯において始めるようになる、ということです。」(ハイデルベルク信仰問答 103)

①「休みの日」

安息日の起源は創造の出来事にさかのぼります。人間が他の被造物と違うことは「神の似姿」に造られたことです。そこに神の思い入れや愛着を見ます。個人的には創造主のかたちに似せられ、社会的には統治主の働きを代行し、最高の作品です。その「非常によかった」創造の御業を終えて、休まれました。疲れたから中断ではなく、完成したから休まれた。いや休みこそ完成でした。天から完成した被造物を眺められ、とりわけ美しい人間を「愛でて」いました。このように神が休まれたゆえに、神の似姿である人間も休息を命じられます。生活習慣以前に人格的に必要です。他の被造物は安息日を取ろうとしません。

②「聖なる日」

神に倣って、手を休め、心を休め、霊を休める。すると明日の力が漲(みなぎ)る。「聖=分離」の意ですから、日曜は特別な日ゆえ、仕事を前日までに片付ける。私たちが時間を捧げるのは楽なことではありませんが、それが愛の証拠です。安息日の本質は消極的な休みではなく、聖い御霊の働きを通して真の安息を求めるところの積極的な休みにあります。原文「覚えよ」は文頭です(8節)。罪深い私たちは神の恵みをすぐ忘れ、世は休日返上でマナを集めよと迫り、サタンは私たちから安息日の主との交わりを奪おうと、躍起になっています。私たちは安息日を「聖別」し、本気で休み、本気で神の聖さを求めましょう。神の安息にピリオドはなく(創 2:3)、「7日目」は実は安息のスタートでした。私たち の安息はキリストにより永続します(ヘブ 4:3)。されど神は働かれます(ヨハ 5:17)。それは御自分の存在=安息だからです。儀式的には廃止されても、私たちは安息日で平日の鋭気を養うのみならず、無限の広がりを見るのです。



PDF Complete
Your complimentary use period has ended.
Thank you for using PDF Complete.

[Click Here to upgrade to Unlimited Pages and Expanded Features](#)

2月3日

「備えをせよ」

出エジプト 20:12

武安 宏樹 牧師

「わたしがわたしの父や母、またすべてわたしの上に立てられた人々に、あらゆる敬意と愛と誠実とを示し、すべてのよい教えや懲らしめにはふさわしい従順をもって服従し、彼らの欠けをさえ忍耐すべきであるということです。なぜなら、神は彼らの手を通して、わたしたちを治めようとされるからです。」(ハイデルベルク信仰問答 104)

第5戒は人に対する戒めの最初ですが、創造主の子孫繁栄システムを遡ることから、神に対する戒めとの「架け橋」ともいえます。親を敬う「孝」の道は、主君を愛する「忠」とともに古来から重んじられ、人間の美德とされています。けれども聖書では美德や社会秩序以上に、親の彼方に創造主を見上げるのが、その目的となっています。意味としては「孝」だけでなく、「忠」も含まれます。家族の年長者、学校や教会の教職者・役員、職場の上司や先輩も含まれます。指導する立場にある人が、派生的権威を与えられたゆえに敬えというのです。

神の立てられたシステムとして両親を敬い、上に立つ人を尊び、祝福する。でも親は子を、上は下を、一方的に服従を強要すればよいものではありません。パウロは夫婦・親子・主従の3つの関係で、上の者の義務まで対等に命じます(エペ 5:22-6:9)。神が立てただけでなく、キリストの支配と従順に倣うこと。第5戒は双方の愛の交わりを通して、神のシステムを尊ぶことにあります。神と人との間に一線があるように、「礼儀」(I コリ 13:5)を失わないことです。たとえ子が親をいさめる時でも謙虚でなければ、親の耳と心は開かれません。

神の立てられた秩序ゆえ、両親を敬え。私たちは適用できるでしょうか。難なくできる人もいれば、心の傷ゆえに困難を覚える人も多いことでしょう。親に暴力、先生に体罰、上司にセクハラ、友人にいじめを受けて育った人が、どうして親や上の人を愛し、敬うことができるでしょうか。難しいことです。立場の変化や時間の経過もありますが、神の愛を受けたから、赦されたから、私たちは人を敬うようになります。神との和解のない人生は空しいものです。私たちの親族や関わりを持った人々は、私たちにとって神のレッスンです。許し、祝福し、祈るために、長い時間がかかっても、御霊が働かれるときに、私たちは尊敬できない者から、尊敬する者へと変えられます(ガラ 5:22-23)。



*Your complimentary
use period has ended.
Thank you for using
PDF Complete.*

[Click Here to upgrade to
Unlimited Pages and Expanded Features](#)

2月10日

2月17日

「姦淫してはならない」

出エジプト 20:14

武安 宏樹 牧師

「わたしたちの体と魂とは聖霊の宮です。ですから、この方はわたしたちがそれら二つを、清く聖なるものとして保つことを望んでおられます。それゆえ、あらゆるみだらな行い・態度・言葉・思い・欲望、またおよそ人をそれらに誘うおそれのある事柄を禁じておられるのです。」(ハイデルベルク信仰問答 109)

第7戒は人間の家庭生活のあり方、正しい性の関係について命じています。わが国では法的に姦通罪規定は廃止されても、道徳的には不倫も婚前交渉も当たり前のように行われており、そんな世の中で「聖く正しく」を志す人々は、堅物だと笑われるのがせいぜいです。だから「姦淫するなかれ」の彼方にある、結婚の祝福を私たちはまず見てから、なぜこれを避けるべきか理解できます。

創造主はアダムにまだ共に交わることのできる助け手が居ないのを見て、「人が、ひとりであるのは良くない。彼にふさわしい助け手を造ろう」(創 2:18)と言われました。同性でも親友はいますが、男のあばら骨から造られた女は、それ以上のものです。男性が助け手である女性と共同で建て上げることで、男性はリーダーシップの、女性は目につかない部分を助ける喜びが与えられ、「私の骨からの骨、肉からの肉」(創 2:23)と互いにピッタリの存在となります。創造主を知って交わることなしには、結婚生活の究極的な理解に至りません。

だから結婚は神が与えられた制度ゆえ、そこからの逸脱は不幸への罫です。不倫も婚前交渉も良いことは一つもありません。祝福を失うだけのことです。罪悪感と嫌悪感に苛まれます。夫婦が疎遠になり、親子関係に悪影響を与え、家族にすきま風が吹きます。誘惑に陥るのは簡単ですが、自分を傷つけます。性の濫用は体を傷つけ、心を苦しめ、霊を束縛する悪魔の足場となります。ひいては離婚と性病の増大、出生の減少、家庭崩壊は国力低下となります。逆に主にある健全な家庭や男女交際の模範は、世への強力な証しとなります。

結婚生活を聖く保ち、性の濫用を避けるのは、肉体が神から与えられた、「聖霊の宮」(I コリ 6:19)だからです。過去に罪を犯した人には赦しがあります(I ヨハ 1:9)。夫婦の関係を大事にしましょう。それは誘惑から身を守ります。

「盗んではならない」

出エジプト 20:15

武安 宏樹 牧師

「神は権威者が罰するような盗みや略奪を禁じておられるのみならず、暴力によって、または不正な重り・物差し・升・商品・貨幣・利息のような合法的な見せかけによって、あるいは神に禁じられている何らかの手段によって、わたしたちが自分の隣人の財産を自らのものにしようとするあらゆる邪悪な行為また企てをも、盗みと呼ばれるのです。さらに、あらゆる貪欲や神の賜物の不必要な浪費も禁じておられます。」「わたしが、自分にでき、またはしてもよい範囲内で、わたしの隣人の利益を促進し、わたしが人にしてもらいたいと思うことをその人に対しても行い、わたしが誠実に働いて、困窮の中にいる貧しい人々を助けることです。」(ハイデルベルク信仰問答 110/111)

「盗む」とは所有権者から奪う意味ですが、「芸を盗む」など許可されれば、いくらでも盗めるのであって、要は所有者が所有権をどう扱うか次第です。第8戒には「5W1H」が記されておらず、何を誰から盗むか分かりません。けれども什一献金規定の箇所を見ると「神のものを盗む」とあります(マラ 3:8)。神が各人に各々の所有物の管理を委ねているというのが、聖書の思想です。すると所有物の概念が根本から変わり、所有権が絶対から相対になります。神に与えられた恵みをお返りする献金が代表例で、喜びと誠実が問われます。全世界がこのようになれば、領土問題はじめ世の多くの紛争が解決します。秩序維持にも有益ですが、まず隣人を愛することがその目的です(マタ 22:39)。

世の中は持てる者が持たざる者から奪い、自分の権利を主張して争います。国際関係・労使関係・家族関係・・・人を大事にしない社会構造は目先の利益とパイの奪い合いと化し、長期的には社会全体が打算的に弱っていきます。私たちはひたすら神の所有権を念頭に、隣人愛を祈って考えることに努める。隣人と誠実に向き合う彼方には、隣人を創造された主と向き合うからです。私たちは金や物のみならず、知恵・労力・時間・祈りなどを捧げたいでしょうか。悔い改めの思いをもって、「神のさまざまな恵みの良い管理者」(I ペテ 4:10)とされたいものです。けれども以上の各論より、もっと大きな恵みがあります。それは私たちの存在が神の所有権にあること。だから多くを求められます。神が富んでおられるので、いやいやではなく喜んで与え、そして与えられる。後向きで律法的な生活ではなく、前向きで恵みを活用する生活は楽しいです。

3月3日

「偽証してはならない」

出エジプト 20:16

武安 宏樹 牧師

「わたしが誰に対しても偽りの証言をせず、誰の言葉をも曲げず、陰口や中傷をする者にならず、誰かを調べもせずに軽率に断罪するようなことに、手を貸さないこと。

かえって、あらゆる嘘やごまかしを、悪魔の業そのものとして、神の激しい御怒りのゆえに遠ざけ、裁判やその他のあらゆる取引においては真理を愛し、正直に語りまた告白すること。さらにまた、わたしの隣人の名誉と威信とを、わたしの力の限り守り促進する、ということです。」(ハイデルベルク信仰問答 112)

偽証といえば裁判を想起しますが、隣人との身近な関係にも適用されます。「嘘つきは泥棒の始まり」とあるように、私たちの諸々の罪の入口が偽りです。「嘘も方便」と、世の中では偽りも時と場合と大勢によって、まかり通ります。そんな偽りの世の中で、真実を証しすることがキリスト者の存在意義です。真実な神は偽りを許さないため、神のものとなったキリスト者が偽るとき、内なる霊が悲しまれます。周囲の評価を恐れるのも日本人特有の弱さです。正しくなくともみながよければ、物事が円滑に運んでしまう社会だからです。

第9戒は偽証の禁止ですが、その精神は隣人の名誉を守ることで、前半の第3戒と対応します。神にいつも偽って誓う人が、外圧に屈せず隣人の名誉を守るなど不可能です。反対に神は私たちと偽りの契約を結んだり、日頃の行いで契約解除しません。神の御性質が真実である中に、救いの選びの確かさと堅忍が含まれています。ペテロは主を否認するという失態を犯しましたが、彼はペンテコステの力を受けて変えられた。聖霊の火を受けて、偽りを語る舌がきよめられたのです。聖化は瞬間的よりも漸進的で、賜物と実のバランスに応じて謙遜になります。

私たちの腐敗した舌を生かすのは、聖霊の働きと信仰、それ以前に愛です。自分を偽り、隣人を貶める罪人が、神の深い選びの愛で解放されたからです。けれども偽りではなく真実を語るのは、簡単でも小さなことでもありません。真実を暴露すればいいと開き直り、隣人を傷つけたままで逃げる人がいます。それよりは沈黙の方がマシですが、語るべき真実を隠すのは偽りと同じです。何をどのようにどのタイミングで語るのかは、私たちの全人格が問われます。主の前で偽りを悔い改め、真実な者へと聖化されるよう、祈り求めましょう。

3月10日

「むさぼってはならない」

出エジプト 20:17

武安 宏樹 牧師

「この世においては、だれも十戒を守ることができないのに、なぜ神はそれほどまで厳しく、わたしたちにそれらを説教させようとなさるのですか。」

「第一に、わたしたちが、全生涯にわたって、わたしたちの罪深い性質を次第次第により深く知り、それだけより熱心に、キリストにある罪の赦しと義とを求めようになるためです。第二に、わたしたちが絶えず励み、神に聖霊の恵みを請うようになり、そうしてわたしたちがこの生涯の後に、完成という目標に達する時まで、次第次第に、いよいよ神のかたちへと新しくされてゆくためです。」(ハイデルベルク信仰問答 115)

第10戒は、第6～9が具体的行為に現れた罪に関する戒めであるのに対し、むさぼりの意志＝心の中の罪であるのが異なります。「あらゆる罪悪の根源」とルターが言うように、他の全ての罪の底に流れる、最も根本的な罪であり、ダビデ(Ⅱサム 11:)とアハブ(Ⅰ列 21:)に見られ、偶像礼拝と同じです(コロ 3:5)。欲望が導火線となって、偽証・盗み・姦淫・殺人が起る。不満足・羨望・嫉妬、この欲望の波をだれが制御できるのか。最後がむさぼりの禁止ということで、十戒が結局内面的なのだと分かります。自己中心＝罪とは、厳しい要求です。この避けがたい罪に向き合う時に、私たちは第10戒→第1戒に戻されます。つまり自分が創造主と結ばれている幸いを見上げて、信頼することでしか、解決の道がないことを十戒は示しています。「律法主義」はナンセンスです。

パウロは律法と罪との関係、「信仰義認」についてローマ書で詳述します。私たちは律法に「死んだ」。死ぬよう努力するとか、死につつあるのではなく、原文の過去形受動態が示す通り、「キリストにあって」死んだ＝殺された者で、私たちはバプテスマを受けて、キリストのからだに「接ぎ木」された者です。死んだとは、あらゆるむさぼりを引き起こす罪の支配下から、解放された。律法を守れない古い肉の自分に代わり、律法を全うしたキリストの御霊に、生かされているのです(ロマ 8:1-2)。十戒後半の精神は隣人愛に要約されると、主イエスは言われました(マタ 22:39)。キリストに解放された自分を愛せれば、私たちは御言葉どおりに、隣人を自分自身のように愛することができます。ローマ書の7割は信仰義認の土台、残り3割が隣人愛の教会が建てられます。この土台の上に、私たちは隣人愛の実践へ献身が迫られるのです(ロマ 12:1-2)。

3月17日

「律法の精神」

出エジプト 22:34-40

武安 宏樹 牧師

律法学者の間で膨大な律法の軽重を論じることは、神学的に重要でした。難問で陥れようとしていた彼らを、主イエスは基本的な解答で黙らせました。彼らは肩透かしと共に、子どもでも分かる答を返され、皮肉を喰らいました。小さな戒めの守り方は几帳面でも、大きな戒めである愛が欠けていたのです。原語はどちらもアガペの愛が使われており、神の愛で神と人を愛することが、求められています。逆に愛さえあれば律法不要という無律法主義も誤りです。聖書で命じられたことを行おうとしなければ、神を愛したとは言えませんし、主イエスが自らを捧げたように隣人を愛さなければ、独善的な愛となります。パウロ曰く「愛は律法を全うします」(ロマ 13:10)。愛は「律法の仕上げ」なのです。全ての目的が神を愛し、隣人を愛することにつながるか吟味されるべきです。その中に信仰生活・家庭生活・人間関係も、全て位置づけるのがキリスト者で、窮屈に聞こえますが、「その命令は重荷とはなりません」(Iヨハ 5:3)とあります。かつて罪の奴隷として、何の希望も無くなすがまま生きていた私たちを、主イエスが解放してくださり、律法を喜ぶ義の奴隷(ロマ 6:18)となりました。「主は隣人への愛をわれわれ自身への愛にのっとらせた」(カルヴァン綱要)のです。神を愛することと隣人を愛することとは不可分で、片方だけでは異常です。神が愛の方ゆえ、信じる私たちも隣人を愛することができる者とされました。世の人は限界ゆえできないことが、私たちを通して主の愛は無限に流れます。その愛が教会・家族・職場・社会を変えます。足りなければ祈りで解決します。さらに聖霊は私たちを練り清めるだけでなく、多様な賜物をも与えています。この律法を完成し、総括するところの愛を、私たちは求めましょう(IIヨハ 6)。そして隣人に神の愛の多様性をもって、時に厳しく、具体的に愛しましょう。「律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係」(ガラ 3:24)となった。律法に救う力はありませんが、律法を通してキリストを信じるほかに道がないことを信仰によって悟ります。私たちは愛によって律法ののろいの下でなく、光がプリズムを通していくつも輝きを見せるように、愛の律法に生きるのです

3月24日

「愛された奴隷」

ピレモン 1-25

武安 宏樹 牧師

本書はエペソ・ピリピ・コロサイの各書と合わせて、獄中書簡と呼ばれます。著者パウロ自ら「キリスト・イエスの囚人」(1節)と名乗るのは、ここだけです。そこには卑屈な奴隷根性は微塵もなく、牢獄で出会った逃亡奴隷オネシモが、罪人からキリストに変えられていく喜びと、彼への愛情にあふれています。当時のローマ帝国では奴隷は生きた道具で、主人に生殺与奪の権が与えられ、とりわけ逃げた者には、制裁のみならず十字架刑までも許されていました。主人ピレモンは信徒とはいえ、自動的に罪を許すことにはなりません。

社会的な奴隷制度についてはパウロは言及せず、オネシモを自由の身にと懇願もしていません。危険を承知で、一旦主人の送り返そうとしているのは、依然奴隷の身分のままのオネシモでした。それはパウロが要求するのではなくオネシモと同じ「囚人」の立場から、善処の判断を委ねたということ(14節)、自由意志に訴える一方、丸投げでなく、連帯責任まで申し出ました(17節)。長年奴隷として生きてきたオネシモは、パウロとの交わりを通して初めて、愛を受けました。人は自由な愛で育まれます。管理教育はロボット化です。強いられ、殴られ、絶えず身の危険におびえていた彼は、自由がわからない。だから可哀想とパウロの権力で解放すれば、今度はパウロのロボットになる。今後の人生に必要なのは、自由な愛の中で「解放された奴隷」として自立させ、そのためにパウロは「右の手のなすことを左の手に知らすな」(マタ6:3)の原則を貫きました。人の業の先行は主の業を阻害することを、彼は熟知していた。形としては主人の意志で許し、無罪放免を宣言し、戻してほしかったのです。自由意志に委ねるには信仰が要ります。私たちは人の業で隙間を埋めようとします。パウロは両者に対して「貸し」を作らないことに、腐心したのです。

一人の逃亡奴隷が悔い改めて入信するのみならず、その後の身分にまで、心を砕いて世話しようとするパウロの牧会者としての心が、よく分かります。魂との関わりの彼方に、福音による全世界の和解を展望します(Ⅰコリ12:13)。聖なる神と罪人との和解のいけにえとなったキリストの姿を見上げながら、人が強いるのではなく、キリストの福音が赦しと愛を促されるのが分かります。

3月31日

「心はうちに燃えていた」

ルカ 24:13-35

武安 宏樹 牧師

キリストの復活がなければ、私たちの信仰は「実質のないもの」「むだ」だと、逆説的に復活の事実を単純に信じる重要性をパウロは強調します(I コリ 15:)。四福音書に降誕の省略はあっても、復活の省略がないことでも分かります。仮死状態・幻覚・捏造などさまざまな反論が、これまで提起されてきましたが、主イエスはトマスに触らせ(ヨハ 20:27)、ヨハネは「手でさわった」(I ヨハ 1:1)と、霊的のみならず肉体的な復活による、交わりのリアルさを聖書は語ります。

とはいえ直後の弟子たちや女性たちの反応は、すんなりとはいかなかった。御使いが弟子より女性に先に現れたのは興味深い。彼女たちの信仰は一途で、御言葉を想起して受け止めることができた。他の人々はそうではなかった。エマオ村へ向かう二人の心も、「さえぎられて」(16節)暗くなっていました。思わぬ質問にも、十字架の出来事も知らない田舎者としか認められなかった。返答がすべて過去のこととしか説明できないことでも分かります(21-23節)。鈍い彼らの横で忍耐強く聞きながら、復活の主はカウンセリングをしながら、聖書全体を説き明かす中で、失望で塞ぎ込んだ心が徐々に溶けていきました。

そして旅人がパンを裂いた食卓の光景から、ようやく目が開かれたのです。形骸化した信仰の中に主が入って来られて、交わりが回復して、心は燃えた。彼らは主と食事を共にする中で臨在の信仰へ変えられた。聖書全体や教理の理解も大事ですが、それだけでは不十分で、人格的な熱い交わりが必要です。臨在とは神秘主義ではなく、パン裂きという日常的動作を伴う事柄でした。私たちの聖餐は、食事という動作を通して、聖なる神を見上げるためです。もっと親しく主とお交わりするために、全体的に復活を捉えたいと思います。神の子だけでなく人の子、霊的だけでなく五感に訴える肉体を使った動作、主観だけでなく歴史的事実に根差した客観的信仰、個人的だけでなく教會的、エマオ途上の弟子たちは知性と感受性の両面から教えられ、励まされました。そして彼らの外側で起こったことが、不思議と内側の御霊で燃やされます。十字架の贖いが自分のためと自覚すると、復活が自分にリンクされるのです。主イエスの死と復活の出来事をそのまま受け取ることで、全ては始まります。

4月7日

「八つの幸い(序)」

マタイ 5:1-2

武安 宏樹 牧師

新約の山上の説教(=八つの幸い)は旧約の律法(=十戒)と対照されます。エジプトから解放を導いたモーセと、世の罪へ贖いを成し遂げたキリスト。人間と神の子で語る者の立場は異なりますが、どちらも主の民の基準です。

この教えの厳肅さは、「山」「座って」「口を開き」「繰り返し教える」ことから、伝わります。十戒が民全体に語られたのに比べ「十二弟子に対する就任説教」とあるように、主イエスから厳選された弟子たちへのハイレベルな訓示です。最前列で聞き入る弟子たちに、これから昇天までの必要な教えを施しながら、「研修期間」の頂点に、十字架を前につまずき、復活を前に立ち直りがあり、卒業の訓示として宣教命令があります。宣教命令は「あなたがたとともに」と、内面的な臨在の励ましで幕を閉じます。彼らは研修最初の山上の説教から、最後の宣教命令に至るまで、主イエスと過ごしながら、内面を養われます。

私たちはこの「八つの幸い」が夢物語ではなく、自分のものとなることを、信じているでしょうか。主イエスと弟子なら可能でも、自分にはとても無理。だとしたら何のために語られたのか。これを福音と切り離してはなりません。心が貧しくも、きよくもなく、柔和でも、平和を造ってもいない弟子たちが、キリストの福音の力によって、「八つの幸い」に与る者に変えられていきます。救いは一回の出来事だから、私たちが信じた瞬間にすでに与えられています。漠然とした未来にではなく、現に与えられている幸いをいかに受けるかです。

「幸福(さいわい)なるかな！」(文語訳)は原文では文頭に来るので、感嘆文に訳せます。それは人間的な事の運び方や、時の運や経過で消えてしまうものではなく、苦しみに遭っても消えない、この世の何者も奪えない、神の与える幸いです。「八つの幸い」は、私たちの努力や禁欲の結果で得られるものではありません。「happiness」は文字通り偶発的ですが、「その喜び(よろこび)を奪ふ者なし」(ヨハ 16:22 文)とあるように、人生の出来事や変化に影響されることのない祝福を示します。信仰が元気で、心の中に平安がある時だけでなく、弱っている時も同様です。自分の外に捜し回っていた幸いは、キリスト者の内に臨在し平安を与えます。

4月14日

「八つの幸い①」

マタイ 5:3

武安 宏樹 牧師

「心の貧しい者」とはどのような人を差しているか、考えたいと思います。心の豊かさ＝寛容・慈愛・忍耐・知恵、貧しさ＝自己中心・情け知らず・狭い心など連想します。近年子どもの心も教育も貧しくなっているように思います。家庭崩壊・社会不適應で孤独になり、自傷&他傷行為が増え、心が病みます。インターネットは仮想社会を形成していますが、貧しい心をぶちまけながら、無責任なムラ社会的発言に満ちています。悪魔は「空中戦」(エペ 2:2)を利用して、横暴な権力者と感覚的に右往左往する群衆を、操作しているように見えます。

ひるがえってキリスト者はといえば、「心の豊かな者」ではないでしょうか。変わらない神の愛に出会って、来るべき戦いさえ恐れるに値しないからです。平安があるから人に尽くす。これは世の人が頑張ってもできないことです。教会は神と人&人と人の交わりの学校だから、こんな素晴らしい所はない。ヨブは豊かな者でしたが、御手の中でみな顔を背けるほど貧しい者となった。しかし苦しみの中で、ヨブは神に出会うことができた。契約関係ゆえです。世の中の心の貧しい人も叫び求めています。神に出会うことができません。本質的に心の貧しい人と、心が豊かなはずなのに貧しくされた人がいます。

「心の貧しい者は幸い」と主イエスはなぜ言われたのか。修道院のような、清貧の生活も一時的には幸いですが、充電したら世の中に戻り証ししないと、キリスト者の意義がありません。貧しい心を誇るならば、それは偽善です。心の貧しさは神の前に破産状態、砕かれた状態からいかに哀れな者であるか、裸の自分を示される中で、神は私たちを引きずり出して抱きしめてくださる。

塵から神を見上げるヨブ(ヨブ 40:4)、罪を露にされひれ伏すダビデ(詩 51:1)。「天の御国はお前たちのもの」と、打ち砕かれて神の愛と出会う交差点です。「人もしキリストに在(あ)らば新(あらた)に造られたる者なり」(Ⅱコリ 5:17)を体験します。

だから本質的に心の貧しい人と、貧しくされた人の相違が分かるでしょう。これからの時代、「貧しい者」が「貧しくされた者」をさらに裸にするでしょう。私たちの真実が明らかにされ、「貧しい者」が光に出会うためです(Ⅱコリ 8:)。そして両者の邂逅がリバイバルとなります。苦難と大収穫の時代が来ます。

4月21日

「あがないのふた」

レビ記 16:11-14

神尾 鋼行 師

① 幕屋礼拝の背景

幕屋は聖所と至聖所に分かれます。そして1年に1回大祭司が入る至聖所でアロンはどんな祈りをするのでしょうか。

② アロン個人の悔い改めときよめ

幕屋を移動する時、雲の柱、火の柱となって神様はイスラエルの民を導かれました。そのように大集団は神様の導きの中で団体行動をとっていました。しかし、信仰はそれぞれ個人によるものでした。その中でアロン個人には悔い改めと清めが必要でした。アロンの子どもナダブとアビフが異なった火をささげたので、神の裁きを受けました。(民 3:4)それはアロンの勝手きままな態度が原因だったからです。それゆえ、アロンに悔い改めが必要でした。

③ 家族のためのとりなしの祈り

私たちはとりなしの祈りをすべきだと言われます。そのためにも、自分のとりなしをすべきです。自分が清められなければなりません。それから家族のとりなし、教会員、親戚、同じ地域と祈りを広げていくことによって視野が広がり、心が豊かになります。そうすると自分の立ち位置がわかり、神様の働きがわかる様になり、最終的に何をなすべきかが見えてきます。

④ 贖いのふたにイエス・キリストの十字架をみる

神様の清さは人間のわずかな汚れをも滅ぼしてしまいます。贖いのふたが緻密に作られ、罪のためのいけにえの血をもって贖いのふたにふりかけられました。これはアロン自身の救いのためのものでした。創世記のアダムとエバのために神様は皮の衣を作り、着せられました。動物の命を絶って着物をつくって下さいました。ここですでにいけにえによって罪が赦されるという行いがされていました。罪が入ると同時にいけにえのわざが行われていきます。

私たちはもう一度、キリストをあがめて礼拝しているだろうかという問いを投げかけてみたいと思います。

4月2日

「八つの幸い②」

マタイ 5:4

武安 宏樹 牧師

悲しむ者は幸いとは、世の中の価値観でいえば受け入れがたいことです。受験の失敗や失恋や家族の死などあるでしょうが、その感情の虜になると、うつ状態になります。喜怒哀楽の豊かな感情は神が備えられたものだから、私たちは悲しみを悲しみとして受け止め、成長の糧となればよいでしょう。しかし最近の若い人は感情自体が枯渇し、反射的な凶悪犯罪が増えています。和歌に見られる季節感や自然の豊かさなど、感覚的な悲しみも忘れていきます。本当の悲しみとはどんな感情か。不感症に陥った心は潤されるでしょうか。心の不調は医学的治療も必要ですが、信仰による回復が必要でもあるのです。

「悲しみ」の原語は、「泣き叫ぶ」ような最上級の強い悲しみを表す語です。花婿なるイエスが取り去られる時(9:15)、大バビロンの滅亡預言(黙 18:19)、父ヤコブが息子ヨセフを死んだと思った悲しみなどに、用いられています。よってこれは人間的悲しみでなく、神の祝福が失われる悲しみと分かります。「慰められる」は未来形で、終末的慰めも展望していると分かります(黙 21:4)。世の終わりに悲しみがなくなるのは、感情表現やうつ状態以前の事柄です。人は罪によって神の栄光から断たれ、暗闇のどん底に突き落とされますが、主イエスは悲しみ全て引き受けられ、十字架上で叫びを上げられた(27:46)。罪の支配を背負われた中には、抑圧された感情的悲しみも含まれています。

私たちは神に見捨てられた悲惨さを思い、初めて激しい悲しみを知ります。そうでないと神の慰めなど分かりませんし、家族友人のためとりなせません。自己中心で病的な悲しみは自分を殺し、神の悲しみを知ると生かすのです。この御言葉を安易に適用する前に、沈潜して引き上げる御手を体験すること。「助け主」(ヨハ 14:16)なる聖霊は罪を示し、私たちが悔い改めと救いに導かれ、心の傷を癒します。主イエスはこの世においては圧倒的に悲しみの人でした。世界が神に背を向け、不義と痛ましい事件が頻発しています。祈りましょう。私たちが主と同様、激しい感情をもって祈りつつ、再臨を待望しましょう。

月 日

「

I テモテ 2:1-2

武安 宏樹 牧師

本書はテトス書とともに牧会書簡といわれ、使徒の働きの終わりの部分にあたります。パウロの片腕にして若き指導者テモテに宛てた勧めの手紙です。本論に入る2章の最初に、他の何よりも最優先すべきこととして命じたのが、祈りでした。「願い・祈り・とりなし・感謝」の四区分はその豊かさを表します。祈りを通して見過ごしていたことを思い起し、危険を察知し、知恵を得る。多くの人のため祈れば祈るほど視野が拡がり、教会全体の霊的状态が分かる。パウロが「絶えず祈れ」(I テサ 5:17)と言うように、祈りは本来忙しいものです。欠けがあっても祈りが先行すれば補われる。若きテモテに必要な教えでした。

続けて祈りの対象として「王とすべての高い地位にある人たちのために」と付け加えます。「すべての人のために」が理想ですが無理なので、とりわけ、王や皇帝や権力者のため優先的に祈る。家庭と教会と国家は神の立てられた制度で、教会は天的で国家は世俗的と全く別物ですが、補完関係にあります。キリスト者は神の権威に服するだけでなく、世の権威にも従わねばならない。だからといって為政者が放縦に、権力を民にふるうのは許されないことです。そうならないように国内は当然のこと、海外の為政者のためにも祈ります。キリスト者が神の前に「敬虔」、人々の前に「威厳」をもって生きようとする、衝突を生むこともありますが、それでも初代教会は祈りを止めませんでした。

だから教会は自分たちのことだけでなく、国家権力に対する祈りの拠点とならなければなりません。けれども為政者から明らかに聖書に反することを強制される場合は明確にノーと意思表示を行い、抵抗しなければなりません。戦時中の日本の教会は権力に屈し、未だに妥協する体質を引きずっています。国家のために祈りつつ、必要あらば抵抗する。これは私たちへの課題です。わが国は現憲法によって権力が縛られ、自由・平和・人権が護られてきました。それを良しとしない為政者が、国民を統制可能な法体系に変えようとします。いま祈らなければなりません。そして祈った末に権力と対峙する段になれば、血を流すまで抵抗することです。流された血潮は国を清め、リバイバルへとつながります。教会には何と大きな使命がこの世で与えられていることか。教会はもろもろの権威を超越した、天の父なる神と直結した出張所なのです。

月 12 日

「八つの幸い③」

マタイ 5:5

武安 宏樹 牧師

「柔和」は、「心の貧しい」と語源が同じで、「謙遜」(民 12:3)とも訳されます。旧約に実例がアブラハム・モーセ・ダビデなど居る中で、モーセから学びます。

① 若かりし頃のモーセ

モーセは異国の地で宮廷に保護されてエリート教育を受けつつ(使 7:22)、ヘブル人としての民族性・宗教性を内に秘めて、人生を模索していました。彼は義憤から殺人というあるまじき手段に訴え、都落ちの憂き目に遭います。正義感ゆえの動機はともかくとして、義憤の危うさを学ぶ必要がありました。期待した周囲の支持も得られず、所詮罪人の激情の発露に過ぎませんでした。受け入れられたら、彼は自分と神を同列に置く不遜で身を滅ぼしたでしょう。ミデヤンの荒野に追いやられたのは、環境を変えてリセットさせるためです。彼の罪深い心は羊を追う 40 年の中で砕かれます。それは大事な時間でした。燃える柴の炎の中で神の召しを受けた時には、打って変わって逃げ腰でした。若くて芯の強い「剛毅」な青年から、「柔弱」な老人へと造り変えられたのです。

② 成長したモーセ

逃げ口上として、口の重いはずのモーセが言い訳を弄する姿は滑稽ですが、神は全てを受け止めながらカウンセリングを施して、彼は立ち上がります。自分の弱さをありのままぶつけたことで、神が信頼できるとわかったのです。真の敵はあらゆる不平不満をぶつけ、彼に代わる指導者を造ろうと画策する身内にありました。そんな民に対して、神は即座に滅ぼすと言われましたが、ここでモーセは求められていなかった両者のとりなしを、自ら買って出ます。民を愛すがゆえに滅びるに忍びない。神の側に立って民をさばくのを拒んで、罪人の側でとりなす祭司となった彼は、大祭司キリストの型です(ヘブ 2:17)。神は最高の義と最高の愛を併せ持つゆえ、板挟みの苦悶をモーセに負わせた。心引き裂かれるジレンマの中、御心にあえて異議を唱えるほどの献身的な愛、それは神に妥協を迫るものではなく、御心を追究した結果でした(出 32:32)。ついには実の姉妹の非難にも、約束の地入りを阻んだ神の前にも抗弁しない。神との究極の信頼関係から柔和は生まれます。ピスガの頂から展望したもの、それはろばに乗った柔和な、そして白馬に乗った勝利のキリストの姿でした。

月 1 日

「」

マタイ 16:13-20

武安 宏樹 牧師

聖霊降臨によって力を注がれた使徒たちは、全世界に出て行き福音宣教と教会を建て上げます。その教会の源流についてペテロの信仰告白に学びます。ピリポカイザリヤはガリラヤ北端にあり、偶像の聖所が立ち並ぶ山麓ですが、ヨルダン川(ヨシ 3:/Ⅱ列 2,5:/マタ 3:)の水源でもあり、主イエスは祈りのために退かれます。そしてこの辺境の地において「最初の教会員」が産声を上げます。

「人々は～」とは御自身の評価を気にしたのではなく、「あなたがたは～」の導入です。世の中は名だたる預言者の再来と騒ぐが、あなたはどう思うのか。弟子代表格のペテロが、「あなたは、生ける神の御子キリスト」と告白しました。それは漁師の子シモン時代の過去→現在→殉教の未来を包括する重い告白、口先や入れ知恵によらず、聖霊の促しによる個人的な告白です(Ⅰコリ 12:3)。聖書知識は手段として大事ですが、全身で信じる必要があります(ロマ 10:10)。

彼の個人的告白に答えて、主イエスは個人的に祝福の約束をされました。それはペテロと同義の「岩」をかけて、アブラハムが民族の祖であるように、ペテロがキリストにより賦与される、新しいイスラエルの祖となることです。それは公同の教会のことで、特定の教団教派や組織のことを意味しません。彼は未だ岩のような安定感には程遠いけれども、主イエスと共に土台となる、身に余る約束です。ちなみに福音書で「教会」の語はマタイの2箇所のみです。「ハデス」は死後のさばきを待つ場ですが、主御自身が死後の復活によって、第二の死を克服した者の初穂として、血の力が救われる者を教会に集めます。

だから教会は私たちが何かする以前に、神が選び告白を促し集団化します。信徒ごとに教会ごとに賜物は様々ですが、同じ主イエスから使徒を祖とし、源流から枝分かれするように派生します。聖書信仰と使徒的基盤が土台です。聖霊の自由(Ⅱコリ 3:17)と霊的秩序(Ⅰコリ 14:40)の高次のバランスが必要です。私たちは「御国のかぎ」の管理も委ねられています。福音宣教と戒規によって、御国の扉の開閉に参画するのです。なんと大きな責任が教会にあることか。私たちのあり方で御国の枠組みが左右されます。恐れつつ主に仕えましょう。

月 2 日

「八つの幸い④」

マタイ 5:6

武安 宏樹 牧師

人間は不思議なもので、神に喜ばれる行いができない罪人にも関わらず、一方ではこのような生き方でよいのだろうかと模索する、宗教的存在です。「神のかたち」(創 1:27)が毀損しても、飢え渴きは存在するので自己実現や、偶像礼拝で間違った満たしを追求します。罪とは行い以前に心の方向性です。「飢え渴き」は靈的必要や願望を現す強い表現です。「鹿が谷川の～」(詩 42:1)死活問題です。カルヴァンはダビデが聖所から追われ放浪するさまとします。教えられるのは「生ける神(水)」と「飢え渴き」が紐付きであるということで、サマリヤの女に言われたことで(ヨハ 4:13)。偶像に飢え渴くのは愚かです。生きておられる方ゆえ、私たちは雑多な言葉を並べつつも大胆に祈ります。

加えて私たちは飢え渴いて祈った結果として、水や糧を得るのではなく、すでに用意されている生ける水および糧を、取りに行くということであり、換言すれば神が私たちのため、予約してくださっています(イザ 55:1/ヨハ 6:35)。文法で「義」は属格でなく目的格が使われており、神の「一部」でなく「全部」を飢え渴く者は幸いと言います。私たちは各論については何かと祈り求めます。神「に」何かを求めることは多いですが、神「を」求めることの少ない者です。各論を手当り次第祈る中で全体に近づけられることは、よくあることですが、「飢え渴き」とは、「あなた」「わたし」の関係の中で存在論的な求めということ。主イエスは最期に至るまで父への渴きに満ちていました(ヨハ 19:28/詩 69:21)。私たちは聖書研究において顕微鏡で観察、望遠鏡で眺め、あらゆる角度から、されど木を見て森を見ないのではなく、私たちの体全体を活用したいのです。神全体・キリスト全体・聖霊全体を、その臨在について求めていきたいのです。「満ち足りる」完成は終わりの日の出来事によりますが(黙 7:16-17/22:17)、地上においても飢え渴く私たちに対して、主は完全に満たしてください。

月 2 日

「八つの幸い⑤」

マタイ 5:7

武安 宏樹 牧師

八福前半の神に対してのキリスト者のあり方から、後半の対人に入ります。とはいえ分断してはならず、「あわれみ深い者」は前回の「義に飢え渴く者」と、深い関係があり、両者が結びついて初めて、真のあわれみが見えてきます。あわれみの賜物を有するキリスト者は、他の賜物に比して多いと言われます。この賜物は教会内を豊かにするだけでなく、対社会への証しへと直結します。

「あわれみ」は「胎」から派生した語で、兄弟や親子への情に神のあわれみがたとえられます。エレミヤはあわれみと「はらわた」とをかけます(エレ 31:20)。腸がちぎれるほど、煮え返るほど、悲しんだり怒ったり心配したりするのが、神がどんなに罪深くとわが子を思うように、御自分の民を案じる証拠です。新約ではマリヤの賛美にあるように、あわれみは救いへ連なります(ルカ 1:50)。主イエスのあわれみは病人・悪霊憑き・娼婦・罪人など社会的希望のない者へ、ついには救われる希望のない全人類のために、十字架で模範を示されました。義人は皆無なので(ロマ 3:)、神の側に救いやあわれみの義務はありませんが、それでも何とか救いたいと考えたので、無罪の独り子を犠牲にするという、一線を越えた、ある意味で無茶苦茶な手段をとられた。これが真の同情です。

大抵の人は苦しんでいる人を前にしても、ここまで心砕いて苦しみません。もしそのような配慮をみなぎ努力し始めれば、社会は劇的に変わるでしょう。けれども肉の力で続けると必ずぶつかるのが、自分の偽善という問題です。奉仕すればするほどに、自分の内に肝心のあわれみがないことを痛感します。これこそが罪人の苦しみです。そして主イエスはこの一線を越えて来られた。私たちはあわれみのミニストリーを展開する時に、主イエスの御姿なしには不可能です。やれと言われたら、大胆にその人の中にまで入って、共感する。やるなと言われたら、どんなに魅力的な働きでも、悲惨な状況でも撤退する。手を出さなくとも背後で祈りつつ、主の御手が伸ばされること、次の派遣を、待ち望めばよいのです。なぜなら神の愛の御手は絶えることがないからです。聖霊の支配下で奉仕すると、私たちの感情・理性・霊性がピタリと符合します。仕えれば仕えるほど、腹の底から次の力が沸いてきて、実が残ります。あわれみの賜物は私たちの感性でなく、天からの祝福であると覚えましょう。

月 日

「八つの幸い⑥」

マタイ 5:8

武安 宏樹 牧師

八つの幸いには相互関係がありますが、「心のきよい者」は「悲しむ者」に、対応します。自分の罪深さ、悪事を犯す以前にしたいと願う心に、悲しむ者。汚れを悲しむ者がキリストに求め満たされた結果、心がきよめられること。彼らは神を見るとありますが、物見遊山で見るのは禁物です(出 19:21-22)。神が聖である以上、私たちが聖でなければ会う資格がありません(レビ 19:2)。裏を返せば、会ってはならないのではなく、所定の段階を経て会えるのです。

律法学者は身体的きよめから心のきよめへの視点が、欠落していました。「心の」と付加されている理由がここにあります。心は身体と対立概念ですが、「霊・たましい・からだ」(I テサ 5:23)を全体的に捉えるのが、聖書的人間論です。主イエスは律法から心を切り離して、骨抜きにしようとする彼らに向かって、激烈に非難し(23:25-33)、それほど外面で本心を偽る信仰は罪深いのです。「きよい」とは混ざり物のない、水でうすめられない、二心ないという意です。神に捨てられるか否か、自らを顧みず瀬戸際の祈りを捧げるダビデのように、私たちは一心に求める祈りを、神にどれほど捧げてきたでしょうか(詩 51:)。律法学者の偽装した行いと同じように、人に評価されなければ怒りをぶつけ、評価されたらさも聖化の過程にあるかのように、高ぶっていないでしょうか。きよくない者は再臨まで神を見られず、見たと思えば審判主です(23:39)。

そんな私たちがきよくなり、きよめられるには、罪深さを悲しむことです。自らの罪深さをも受け止められない罪深さを、人ではなく神に出すことです。心の深い部分の罪責感・高慢・恐れが砕かれないと、何しても罪深いままです。砕かれぬ人に限って、聖霊の名を騙り他の霊で自分に箔をつけたがります。キリストにつながる者は、罪の内にあることを悲しみ、清くします(I ヨハ 3:)。目で見ただかどうかより、見ているかのように親しく生活します(I ペテ 1:8-9)。地上の生涯でおぼろに見える御方が、再臨では否応なしに見えるようになる。その時には私たちが主の似姿に変えられますが、通信簿で全て明らかになる。善行も罪もそうですが、どれほどきよさを求めたか、神を見ようとしたかを、重視されるのではないのでしょうか。神は行い以前に、見てほしいからです。救われて善い奉仕をしても、神を見ようとしなければ、悲しまれるのです。

月 1 日

「驚くべき主の忍耐」

創世記 33:18-35:5

原 敏夫 師

① ヤコブの身勝手

ヤコブはハランに 20 年滞在、2人の妻・11 人の息子(ベニヤミンは出生前)、そして1人の娘(ディナ)をもうけます。シェケムに移ってしばらくした頃、当時 15 歳位と思われるディナがその土地の族長の息子に辱めを受ける事件が起きます。このことを通してヤコブの隠れた人間性が、あらわにされます。父親であるヤコブは何も行動を起こさなかった。父のこの態度に怒ったのか、息子たち、特にディナと同じ母親レアの子シメオンとレビが、シェケムの人々を皆殺しにします。もちろん彼らの行動は、行き過ぎたものでしたが、この時にもヤコブは自分のことしか考えません(34:30 に7回も「私」が登場)。

② 神への不従順

この事件はシェケムで発生。しかしヤコブが帰るべきところは 40 ㎞離れたベテルでした。居るべきところに居ない。彼はこの事件が自らの不従順ゆえ起きたと直感したはずです。なすべきことは分かっている、後ろめたくて力が出ない。信仰は持っている。でも不従順なのです。

③ 神様の赦しと愛

このようなヤコブに神様は、「立ってベテルに」(35:1a)と何の咎めもない。主の前に出ることを赦し(35:1b)、神に目を向けさせ(35:2-4)、追っ手から彼らを守ってください(35:5)、祝福さえもして下さるのです(35:9-13)。驚くべき主の忍耐と愛ではないでしょうか。

④ 私たちは？

私たちは、ヤコブをこれでも信仰者かと思えます。しかも、何度も神様の奇跡的な恵み・神体験をしながらです。

けれども神様はヤコブを無条件に赦されるのです。

私たちがヤコブ同様に、ずるく不従順なところはないでしょうか？

でも、神様は私たちを赦してくださっているのではないのでしょうか？

私たちの周りにヤコブのような人がいるのでしょうか？

私たちはその方に、どのように接したらよいのでしょうか？

月 23 日

「八つの幸い⑦」

マタイ 5:9

武安 宏樹 牧師

後半3つ目の「平和をつくる者」は、前半3つ目の「柔和な者」に対応します。柔和とは軟弱・無気力と違い、むしろ内面が整えられ一本筋の通った人です。加えて後半4つは、「あわれみ深い者」→「心のきよい者」→「平和をつくる者」→「義のために迫害されている者」とつづき、同心円状の拡がりを感じます。以上2つの構造を見ると、「平和をつくる者」がどういう者か見えてきます。

「平和」とは戦争がない状態なら成立するかといえば、あくまで相対的です。わが国の平和状態も戦後 70 年近く経ちますが、曲り角に来ていると言えます。日本国憲法前文では、敗戦の反省に立った国民が、国際平和の実現のために、「全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ」と記されます。この平和実現への希求は他力本願ではなく、積極的行動が意図されています。

主イエス曰く聖書の平和について「世が与えるのとは違います」(ヨハ 14:27)。原語では「人間の最高の幸福をつくり出すすべてのものを、相手に願う」意で、表面的に周囲とうまくやるのは、主イエスの意図とは異なります(10:34-36)。だからといって戦争主義者でもありませんが、キリストを信じて福音の力が平和をもたらすと思えば、自他共に戦いばかり生まれることがよくあります。

平和を「つくる」とは、戦いが現に進行する只中で「つくる」という意味です。私たちに様々な戦いがあります。自分(肉)・世(周囲)・サタン(霊的)などなど。こんなことなら、キリスト者にならない方が楽だと思ふこともあるでしょう。それでも私たちが平和のため戦いを止めないのは、世と違う平和だからです。使徒パウロは、「キリストこそ私たちの平和」だと断言しました(エペ 2:14-16)。彼の生涯は平穏無事どころか迫害と困難だらけ。その中で平和を体験します。自らの労苦を誇るより、ひたすら十字架の苦難と和解を見上げて従いつつ、平安の御霊に導かれてきたら、結果的に平和がつくられた(II コリ 11:23-28)。彼の苛酷な生涯を見れば、世の平和主義者と同列で並べられる訳ありません。私たちはま ずキリストにあこがれること、そして荒野の地ならしから始めて、人々の渇いた心に、対立した人間関係に、御言葉が流れるよう祈りましょう。そのように力を尽くすならば、主が道を開かれ、実を結ぶ時がやがて来ます。

月 30 日

「八つの幸い⑧」

マタイ 5:10-12

武安 宏樹 牧師

① 「義のために」(10 節)

「義のために」とは神の義のことであって、私たちの正義ではありません。自分の行いの正当化のため、「迫害＝幸い」と当てはめてはいないでしょうか。私たちの熱心ゆえ御心から逸脱したことは、それはそれで御手があります。ここで主イエスが言われることは、「義のために」迫害された者の祝福です。いたずらに苦しむこと、不必要な苦しみを身に招くことでは、ありません。しばしば迫害の中に政治的理由が混在し、「何のための」迫害か問われま。す。「一粒の麦～もし死なば」(ヨハ 12:24)とあるように、殉教の血は教会の種子となりますが、だからといって美化したり、「殉教のための殉教」は違います。「この世と調子を合わせてはいけません」(ロマ 12:2)とパウロが言ったように、私たちの十字架とは何なのか。何が正しい応答なのか祈りと知恵が必要です。

② 「迫害ゆえに喜ぶ」(11～12 節)

キリストのお受けになった迫害は、肉体的&精神的&霊的の三重苦でした。悪魔は荒野のリベンジとして「神の子なら、十字架から降りて来い」(27:40)と迫りました。十字架に迷いはありませんでしたが、誘惑や孤独と戦いました。そして死により勝利されました。肉体だけならともかく霊的戦いは苛酷です。私たちに落ち度があれば迫害ではなく罰です。無罪で初めて迫害となります。「ありもしないことで」とあるように、大抵キリスト者の迫害に正当な理由は、ありません。客観的理由が見つからないので、主観的に「でっちあげ」ます。私たちは迫害の不当さと身の潔白を訴えますが、迫害は御心によるものです。神が特別な目的のために私たちを用いるため、敢えて行われます(ヘブ 12:11)。「喜び おどきなさい」とは、山頂を征服した登山家が飛び跳ねて喜ぶ様子です。迫害「にもかかわらず」でなく、「ゆえに」喜ぶのが天に希望を置く生き方です。八つの幸いの最初と最後は、「天の御国はその人たちのものだから」で結ばれ、間の6つの祝福をも内包されていることが分かります。これらを人間的努力で行おうとする愚かさ、全ては天的な事柄、されど地上で打ち砕かれて、生きる希望を失って、現在進行形で戦う人々に語られるべき実際の祝福です。

7月7日

「十戒から八福へ」

マタイ 5:1-12

武安 宏樹 牧師

① 救いを待ち望む民のための十戒

十戒はイスラエルの民がエジプト軍が葦の海に沈められる奇蹟によって、「救われた民」の自覚をもった後、神が特別な関係の中で与えられた契約です。よって律法遵守が救いの条件と説く学者は、大事なことが欠落しています。十戒の背後に見える目的は、「救われた民」がもっと救いと聖に与るためです。神が契約の民を愛するがゆえに、偶像礼拝や不品行を避けよと求めるのです。そして神の造られた家族や社会のシステムを感謝し、満足してほしいのです。けれども律法は真の救いを提供しません。来たるべきキリストの救いのため、人間の罪を明らかにし、キリストを信じるため「養育係」(ガラ 3:24)なのです。私たちは異邦人ゆえ律法教育ではなく、キリストの救いから入った者ですが、だから といって十戒が無意味ではありません。本当の救いを知る民として、十戒の要求を全うすることを証しする責任があります。律法主義でもなく、無律法主義でもなく御霊による自由の律法を喜んで生きましよう(申 30:14)。

② 救われた民に約束された八つの幸い

十戒の倫理が世界基準となったのと対照的に、キリスト者とりわけ弟子にしか理解できないものとして語られたのが、山上の説教(八つの幸い)でした。十戒は真の救いを待ち望む者を教育、八つの幸いは救われた民への約束です。繰り返す「幸福(さいわい)なるかな」(文語)こそ、キリスト者生活の基本を現しています。けれども「心の豊かな者」「喜ぶ者」でなく、「心の貧しき者」「悲しむ者」なのが、深いところ。真の救いに与った者は律法遵守で完成なのではありません。キリスト者は身分(義認)だけでなく、骨の髄まで聖さを求められます(聖化)。八つの幸いはキリストと共に苦しんで、殉教する弟子たちへのメッセージで、十戒よりハイレベルです。普通のキリスト者なら経験しないで済むことが、弟子として真剣に魂・教会・国家と向き合うことにより、痛み、砕かれます。そして「心貧しく」「悲しみ」「柔和」「義に飢え渴き」「あわれみ深く」「心きよく」「平和をつくり」「迫害され」ます。もはや律法ではなく御霊のなされる業です。山上の説教は、十戒の精神「神を愛し、隣人を愛する」を具体的に展開します。救われた者は「宿営の外に出て、みもとに行」(ヘブ 13:13)く外向きの信仰です。

7月14日

「脱ぎ捨てて」

コロサイ 3:1-11

田村 昭二 師

本書は、ユダヤ教グノーシスの「肉体は悪なので徹底的に戒律で縛るべき」という教えを、「人の考え出したもの」と戒めながら、キリスト信仰の本質にふれています。

① 国籍は天に移されている(1～4節)

パウロは「あなたがたは地上のものを思わず天にあるものを思いなさい。」と言い、「あなたがたのいのちはキリストとともに神のうちに隠されてある」と教えています。言い換えると、あなたはいのちの書に名を記されているのだから、地上においても天国人であることを自覚せよ、と言っているのです。

② 天の国籍に相応しく生きる(5～9節)

天国人のあなたは、地上のからだの諸部分の不品行・汚れ・情欲・悪い考え・むさぼりを殺して、キリストに相応しく歩みなさいと命じます。私たちは、キリストが喜ばれるからああしよう、こうしよう、と前向きに生きているかどうかを問われています。

③ 天に国籍をもつ人への約束(9～11節)

「古い人をその行いといっしょに脱ぎ捨てて」の、「脱ぎ捨てて」は武装解除の言葉です。罪を纏った古い人から解放された者には、「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」(Ⅱコリ 3:18)との約束が待っています。

私たちはすでにいのちの書に名を刻まれた者です。御言葉と聖霊に導かれ、悔い改め、頑固な自我を脱ぎ捨てて、キリストのご性質にあずかりましょう。

7月21日

「祈りの手を上げよ」

出エジプト 17:8-16

武安 宏樹 牧師

昨年の祈禱会で学んだ出エジプト記から、私たちの祈りについて学びます。本日の国政選挙のことも祈りに覚えつつ、今この時代に神が何を語られるか、心に留めたいと思います。私たちの本分は政治的発言や活動ではありません。牧師も信徒も等しく御言葉を語ることに、すなわち信仰告白こそ最優先です。キリストが主であることを、「時が良くて悪くても」(Ⅱテモ 4:2)伝えることが、結局は世との戦いとなります。そのために祈り続けることが重要なのです。

イスラエルの民は荒野の旅でつづやきを重ねて、モーセを困らせたので、神は罰としてアマレクとの戦を送られました。これまで水や食物の不足など求めれば与えられましたが、異民族の攻撃は彼らが最も恐れるものでした。長年奴隷だった彼らは備えが不十分でしたが、将軍にヨシュアが立てられ、モーセは丘の上から戦況を見下ろしながら、祈りで後方支援に努めました。

モーセの手の位置の意味するところは、神の祝福の変動というのではなく、手を上げるのは心を神に向けて、全く信頼していることの象徴でした。戦いの勝敗は前線よりも、彼がいかに手を上げ続けるかにかかっています。だから祈りの手を休めない、あきらめない、そして継続することが重要です。家族や友人の救いのため、政治の行く末のため、悪魔との戦いのため、祈る。祈りはやみくもでなく、御言葉の原則に立ち、御霊の導きで祈ることです。自分の力で上げると疲れますが、手の指し示す天から新たな力が注がれます。

さらに祈りはチーム体制で行うことに意味があります。ヨシュアにとって、背後から絶えず祈られることはどれだけ励みになるでしょう。モーセ一人で上げ続けたのではなく、アロンとフルの支えあって、上げ続けることができた。祈り手をつぶそうとして、悪魔はあの手この手で祈りの妨害を仕掛けます。私たちの伝道や奉仕は祈りで始まり、祈りで終わらないと、発展しません。キリストのからだとして皆でバックアップすると、多くの実が結ばれます。

最後に私たちは世の「見張り人」(イザ 62:6)として使命が与えられています。世の動きに敏感であると共に、最後に依り頼むべきは、御名で祈ることです。

7月2日

「自分たちのための神々①」

出エジプト 32:1-6

武安 宏樹 牧師

モーセがシナイ山で神と会見する40日間、アロンはじめイスラエルの民は、麓で帰りを待っていましたが、臨在の雲でなく疑惑の雲が心を覆い始めます。良くも悪くもモーセに依存していた民は、業を煮やしてアロンに殺到します。指導者代行の要請ではなく、「先立って行く神」(複数形)を造ってくれと言う。アロンでは役不足と考えたのか、物分りのいい便利な人とナメられたのか。あるいは脅迫もあったか。結果的に彼は民の偶像礼拝を導いてしまいました。カルヴァン曰く、「人間の才能は、言うなれば、永久的に偶像の製造工場である。そしてついに彼らのたましいも、彼らの目も、全くこれにつながるようになり、ますます目がくらみ、あたかもそこに、何らかの神的なものがあるかのように、呆然とし、驚嘆するのである。」(綱要)。まことの神を信じるができない、信じ切れない靈性に偶像は忍び寄り、ついには相思相愛の関係となるのです。

アロンによる金の子牛の完成に民の喜び様は、尋常ではありませんでした。モーセ不在の重圧感、放縦に墮した民をまとめるのに金の子牛なら悪くない。頭の回転の速さが災いして、民とアロンと、彼らを神から引き離したい悪魔、三者の利害がピタリと一致して、三位一体となって事は進められたのです。私たちは目に見える状況の歯車がかみ合って、万事丸く収まるからといって、即決は危険です。御心を求める祈りなくして、靈性は転落の一途を辿ります。早くも第1〜3戒は破られ、いけにえを捧げる礼拝の座を偶像が占めました。占めたといっても、本来は主なる神の座に不法侵入したに過ぎない神々です。主なる神が永遠の昔から愛の計画をもって選んでくださったにも関わらず、一言で言えばあるべき関係でない相手と、白昼堂々不倫を行っているのです。その礼拝はカナンを異教的習慣そのもので、「戯れた」に性交の意もあります。

「ああ、私は悲しい。この傷のために。この傷はいやしがたい。」(エレ 10:19) 私たちは神を悲しませるような、そして自ら傷つけるような偶像との関わりはないでしょうか。異教文化の中にある私たちに多くの戦いが待っています。妥協でも拒絶でもなく、居ながらにして証しするため偶像を除去しましょう。自らの肉の弱さを認めつつも、愛と謙遜をもって主と家族に仕えましょう。

8月4日

「自分たちのための神々②」

出エジプト 32:7-14

武安 宏樹 牧師

律法授与後、意気揚々と下山せんとしたモーセに衝撃の一報が語られます。墮落したのは「わたしの民」ではなく、「あなたの民」と突き放された言葉に、主なる神の烈火の如き怒りと、主の民が滅亡の危機にあることを悟りました。

「わたしのするまま」にしたら、ここまで苦楽を共にしてきた同胞が減る。彼らに弁解の余地は皆無ですが、モーセは断腸の思いで選択を迫られます。さばきの暁に「モーセの民」創設の特典まで用意され、彼は大いに悩みます。「しかし」(11節)、モーセは主の提案に死をも恐れず、ノーと楯突きます。このことは、主の啓示に私たちがどのように応答すべきか、示唆を与えます。主の御心は天からの一方通行でしか、受け止められないのではありません。民の滅びの淵で、モーセは表面の言葉ではない、神の御心へと飛び込みます。罪への怒りと痛み、聖さと愛。相反する感情がせめぎ合う、神の御旨の海へ。もはや自分の名誉などどうでもよく、民が救われるため一心に嘆願しました。

モーセは御言葉に不従順の罪を犯したのか。そうではなく、信仰によって、聖なる神に反旗を翻し、代々の先達に約束された神の真実に訴えたのです。その結果、神はモーセの嘆願を受け入れ、さばきを思い直してくださった。では御心とは何なのか。首尾一貫性に矛盾すると思う向きもあるでしょうが、「思い直す」(14節)の原語には、「悔いる」「あわれむ」という意味があります。人間が悔いたり思い直すのは悪い結果についてですが、神は悪の源について悔いるのです。滅びの宣告は、彼らが滅びず回心するための愛の機会でした。神が悔い、思い直すことも永遠の神の計画の範疇で、真実な御方なのです。

さばきを宣告される背後で、神の苦しみと情愛とを見ることができます。偶像礼拝を目の当たりにしてモーセは苦しみ、神はもっと苦しんでいました。だから御自分の信頼するモーセに、最初から狭間に立たせることを期待して、キリストの型としてとりなしの苦しみを負わせた。神の深い心があります。愛のないさばきでも正義を忘れた情でもない。私たちは単純な信仰によって、深い神の心を探り求めましょう。暗い世との狭間でとりなしに生きましょう。

8月11日

「聖なる怒り」

出エジプト 32:15-35

武安 宏樹 牧師

モーセは促しを受けて神の板を手に、聖なる山から下界へ下りて行きます。すでに知らされていたものの、民の乱痴気騒ぎを目にした瞬間に言葉を失い、怒りがこみあげてきた。それは彼のではなく、神の聖なる怒りの発露でした。「板の破壊＝契約の破棄」を意味します(申 9:17)。その後子牛も粉碎された。偶像礼拝を通して契約も祝福も絶たれたことを、モーセは思い知らせます。神の怒りはわたみの愛です(雅 8:6)。罪人に祝福を絶ち肅清するの愛です。

目を覆わんばかりの惨状は、責任者アロンが民に罪を犯させたからでした。彼は罪を認めるどころか嘘を並べて責任転嫁。まさにアダムの子孫でした。代々のイスラエルの民が敬愛する大祭司の祖先が、こんな有様とは皮肉です。聖書の赤裸々さと、こんな者を光栄な職務に任命する神の選びに驚嘆します。当然モーセの怒りの矛先は兄に向かいます。さばかれるべき者はアロンです。しかしまたモーセがとりなします。神から遣わされた者として供え物となり、何の効果もない金の子牛に代わって、罪の贖いの真実が現されるためです。

リーダーが罪を放置すれば、雑菌のように全体に繁殖し汚されていきます。逆にアロンの悔い改めが自動的に伝染するかといえば、そうではありません。罪を犯した各人が自分のこととして罪を認め、心を注ぎ出すことが必要です。粉々にして飲まれた金の子牛の水を吐き出す如く、悔い改める者もいれば、その水に親しんで反抗を重ねる者もいます。モーセは妥協しませんでした。主を後にした3000人は肅清、残った民のためにも40日断食祈禱を行いましたもしも民が赦されないならば、自分の滅びを願う。これぞ身代わりの愛です。

山を下りてきた預言者モーセは神の側、罪人の頭となった大祭司アロンは民の側。たとえ実の兄弟でも、罪による隔ての壁は真剣なとりなしと愛とが必要です。とりなすモーセのみならず、アロンもキリストを指し示します。アロンの人間的な弱さと、キリストの完全&永遠性が対比されます(ヘブ 5:)。聖なる神の強さと罪人の弱さ。預言者と大祭司。キリストは両方ご存知です。罪に弱い私たちのため永遠の祭司として、完全な救いを与えてくださいます。十字架で贖いは完成し、今も天上からとりなしてくださいます(ヘブ 7:24-26)。

8月18日

「会見の天幕①」

出エジプト 33:1-6

武安 宏樹 牧師

本書を大別すると出エジプト(1-17:)/律法(18-24:)/幕屋(25-40:)となり、「幕屋」部がさらに、構造についての指示/金の子牛事件/設営、と分かります。だから金の子牛事件は「幕屋」部の折り返し地点であり、大罪を犯した末に、悔い改めをもってとりかかるとのことです。「わたしのため」「中に住む」の二点が、聖所の要件です(25:8)。いくら寸法が正確で、聖所・至聖所が備えられても、金の子牛礼拝所となったり、臨在が失われては、幕屋でも何でもありません。細かい規定の全ては臨在に奉仕するもので、臨在は悔い改めが条件なのです。

先の事件に関して、モーセのとりにしと然るべき処分できりはつきりました。だからといって二度と罪を犯さない保証はなく、簡単に弱さは変わりません。そのことは全知全能の神がご存知ですが、だからといって勘当にしないのが、契約の民、アガペーの愛です。民を見捨てず、敵にあざける口実を与えず、先達に与えた約束を守ることを了承し、約束の地へ導くのも保証しましたが、「わたしは、あなたがたのうちにあつては上らない」(3節)と、臨在拒否します。そこには偶像礼拝への嫌悪感と、民が減びないようにとの配慮が見られます。さらには衝撃の宣告を受けた民がどう反応するか、教育的配慮が見られます。

「この悪い知らせ」(4節)こそ民の罪の自覚、悔い改めのチャレンジでした。飾り物を外したからといって同じ罪を犯さない保証はありませんが、それは、彼らが過去に犯した罪と向き合いながら応答するための、大事な瞬間でした。そして今後の歩みを考えた時に、臨在なき歩みがどれほど寂しいものなのか、痛感しました。だからチャレンジの目的である反省と教育は成されました。ソロモン王が神殿奉献に際して捧げた祈りに、個人的な悔い改めと謙遜とを見ることができます。未来に民が犯すかもしれない罪への赦しを求める点が、実際に捕囚の預言になっているのが圧巻ですが、王は墮落し、神殿は破壊、国は滅ぼされても、それでも民を見捨てないのが神の真実です(Ⅱ歴6-7:)。神殿に比べれば小さいですが、幕屋→神殿→キリスト→教会へと昇華する、歴史的な第一歩として、いいかげんな聖所であつてはならなかったのです。まことの悔い改めを通して、私たちは初めて主の臨在を仰ぐことができます。

8月25日

「会見の天幕②」

出エジプト 33:7-23

武安 宏樹 牧師

モーセは民から離れた会見の天幕にて、親しいコミュニケーションを確立していました。民を導く苦勞で、聖所礼拝なしにやってられなかったのです。職務上の責任感が、御霊によって彼を聖所に追いやったのかも知れません。臨在拒否を聞いたモーセは不満から、「あなたでなければ、動きません」と、御使いでは不十分だと抵抗しました。彼は神を愛し、罪人を愛する者として、どうしても両者を仲介したかった。民の真中での臨在にこだわったのです。主の臨在が留まるかぎり、民はどんな時にも平安に包まれます(民 6:24-26)。臨在の主は、新約時代のキリスト者に内住する御霊のことを、意味します。慰め主を意味する「comforter」は、「com～一緒に」「forte～力」の合成語です。敗北者を慰めるというよりも、戦いの最中に傍に居て力を供給する意です。この力強い臨在体験を経たので、主と共にいることが彼の基本だったのです。目的地までの旅に変化ありませんが、この体験の有無で成長に差がつかます。

「あなたでなければ駄目です」熱い思いを切々と訴え、神の方が折れました。あつかましい、うるさい、しつこく食い下がる信仰を、彼から学ばされます。不正な裁判官にしつこく食い下がるやめめの話に教えられます(ルカ 18:1,7)。門前払いのようでも、そこから勝負です。簡単に引き下がるのは無気力です。神が臨在を通して私たちを追い求める以上、私たちも追い求めるべきです。果して臨在の約束を取り付けて大団円と思いきや、彼の渴望は止まりません。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください」(18節)モーセの要求の本質が、リーダーとしての重圧感だけなら、本章は17節で完結して然るべきですが、神がどこに居られるのか、何をされるのか、これからどこへ行かれるのか、神の御顔を一目でも拝めるなら犠牲を厭わない。いわば臨在ストーカーです。神は私たちに啓示された分だけ栄光を現されるので、正面から拝めませんが、そこまで求める彼のために、とっておきの場所を用意されました(20-23節)。それが旧約時代の会見の天幕であり、キリストの御からだであり(ヨハ 2:21)、私たちキリスト者のからだであり、内住の御霊との交わりです(1コリ 3:17)。私たちはからだと生活全体で、神の宮としてしつこい信仰者でありましょう。

9月1日

「油注がれた王」

I サムエル 10:1-27

武安 宏樹 牧師

士(さばき)師(つかさ)が統治する神政政治は、部分的で単発ゆえに弱いと民から評価され、神は要望を聞き入れます。そして王制となって初代のサウル王が誕生します。医療・調理・灯火にも用いる油ですが、宗教的には主に祭司・預言者・王などの任職に用いられました。単なる儀式に留まらず、奉仕への上からの力として、繁栄や喜びのしるしとしても旧約聖書で登場し、欠乏すると悲哀を現します。

農家の一青年に過ぎぬサウルが王になるとは、誰が想像したでしょうか。周囲以前に彼の意欲も確信も皆無でした。世の宰相なら人為的な選びですが、選民イスラエルを統治する王の選びは、神懸かっていなければなりません。油注ぎを受けたサウルは、サムエルから当日に起きる出来事を言い当てられ、霊的傾注によって預言者の一団と共に預言を始めるという、体験をしました。

サウルのように油注がれた者全てが、即座の体験を伴うとは限りません。ダビデの場合は主に仕えることで、継続的な霊的・人格的成長を伴いました。だから一時的な体験の有無は問題でなく、サウルは神の權威を知るために、そのような機会を与えられたのでしょうか。「手当りしだい」(7節)とは、やりたい放題を追認するという意味ではなく、むしろ臨在に根拠があります。御心に従わず放縦に行くならば、皮肉にもそうなりましたが破滅を招きます。新約時代のキリスト者の場合は破滅はしませんが、祝福から落ちこぼれます。聖霊の働きには賜物と実の二つがありますが、サウルは賜物が先んじました。

体験を得たサウルですが、激しい出来事の連続を未だ受け止められません。冷静に王制への服従を呼びかけるサムエルと、熱狂に飲み込まれる民の対照。王として端緒についたばかりの彼は、どちらに鼓舞されていたのでしょうか。油注がれた者として主への正しい恐れよりも、群衆を敵に回したら手強いと人間を恐れる思いもあったでしょう。自由意志をもって選択するのは彼です。自由をどのように用いるのか。放縦な選択の内に霊的な自由さはありません。私たちは時に素晴らしい霊的体験を得ます。それは主からの選びと励ましです。それによって信仰が強められ、従順によって真の霊的解放を得たいものです。

9月8日

「承認された王」

Iサムエル 11:1-5

武安 宏樹 牧師

サウルは未だ表立った即位式も、これといった業績もありませんでした。支持者を集めて華々しい式典を催すより、時が来るまでは牛の世話を続ける。他の国家に比べて、イスラエルの記念すべき初代王の門出は地味なものです。そしてついに王らしくなる時が来た。それは残酷なアモン人の襲来でした。イスラエルにそしりを負わせ、民の右目を奪おうとする。主への挑戦でした。絶望感に苛まれて泣くばかりの民を目にして、サウルに怒りの霊が臨みます。自分の出番だと意識したのでしょうか。彼は神の霊に従いました(10:6-7)。初心者が往々にして得る幸運のことを、「ビギナーズラック」と呼びますが、王の初仕事ゆえ、謙虚に主を見上げて聖霊の働きに従ったのが幸いしました。私たちが新しい仕事を始める時は慣れないので、よく祈り勉強し備えるので、祝福された働きとなることが多いですが、回を重ねると打算的になると、周囲の評価や自分のプライドが邪魔をします。常に砕かれた思いが必要です。持続できなかつたのは残念ですが、サウルは王として幸先よい始まりでした。

謙虚さの現れとして、人心掌握(7節)および攻略法(11節)が挙げられます。これらは士師時代の実績に倣ったものでした。聖書に記された方法に則って、戦うのはマニュアル通りかも知れませんが、合理的で知恵のある戦い方です。士師時代は神政政治ゆえ主御自身が戦われた。同じ霊的な流れを受けるので、自分が低くされ、神の栄光が現されやすくなります。私たちは聖書の教えを、デボーションで観察→解釈に終始せず、適用まで導かれているでしょうか。そうでないと御言葉を味わっても、自己流で世と戦っているのが残念です。サウルの勝因は神政→王政の過渡期にあつて、霊の流れの継承にありました。初陣における大勝で、必ずしも一枚岩でなかつたイスラエルは結束しました。けれども民の見方は主の介入による勝利よりも、王の信任にあつたようです。サウルは全ての民を前に「主の救い」(13節)を強調し、即位式に臨みました。「ビギナーズラック」かも知れませんが、賭け事のように偶然ではありません。油注がれた者、神がともにおられる者として(7節)、従順による勝利でした。そしてこの従順を続ける限り、祝福は逃げません。どこから落ちぶれたのか。私たちはどこで祝福を見失つたのか。謙遜な者に恵みは尽きません(黙 2:5)。

9月15日

「靈的指導者の引退」

I サムエル 12:1-25

武安 宏樹 牧師

これまで士師ならびに預言者的祭司として、民を指導してきたサムエルの送別説教です。本章がサウル王即位の節目に挿入されたのは、最後の士師、また神政政治の締めくくりとして、靈的な視点から総括を行うためでした。

「私を訴えなさい」と引退する彼が、何のために身の潔白の承認を求めたのか。それは政治の制度的問題や為政者個人の資質に、転嫁しようとする民に対し、彼らがどういう動機で王制を求めてきたのか、本質を明らかにするためです。

サムエルは士師時代最初のモーセに始まり、最後のサムエルに至るまでの、主に従えば勝利、不従順なら敗北、けれども悔い改めれば助けを送られる、主が民になされてきた真実について時系列で、歴史的に説き明かしました。にもかかわらず、頑なに「いや、王が〜」(12節)と言い張ったことが間違いで、この罪を悔い改めなければ、王制に変わっても、彼らの未来は暗いことと、王が主ではなく、王の上に支配者なる主を見上げるべきことを確認しました。

主ではなく王を求める民の心を悲しみながら、主は王制を承認しました。政治制度は譲歩する一方で、歴史的・理性的側面だけでなく雷と雨を通して、体験的に主が御心をあらわにされたことは、民が一転して悔い改めを求めるに十分でした。皮肉なことに彼らは士師の力強さを思い知らされたでしょう。

何かと罪の認識が薄く、すぐに代わりの偶像を探し求めるような民ですが、預言者としてのサムエルが語ろうとしたのは、厳しいことばかりではなく、何故主に従順するのか、罪を犯してはならないのか、厳しく指導されるのか。その背後に主なる神の真実な愛があるから、罪深い民を「あえて」ご自分の民とされたからです。恐ろしい方だから従うとしたらそれは愛ではありません。私たちは愛によって目覚めさせられ、罪を止めます。それが愛の応答です。

その真実な愛を踏みにじるならば、永遠の滅び以外に残されてはいません。この愛ゆえに、そして靈的に鈍い民ゆえに、サムエルは靈的奉仕を続けます。彼は有限ですが、キリストはさらにまさった祈りを天上から捧げられます

9月22日

「もうひとりの息子」

ルカ 15:25-32

布施 恒夫 師

今日の箇所は「パリサイ人、律法学者たち」(2節)に向けて、主イエスが語られたたとえ。主はパリサイ人・律法学者が自分を義として他人をさばく偽善を厳しく批判された。救いは行いによらず恵みによることを確認したい。

① 弟息子が帰ったので喜び迎え祝宴を開く父親に対する兄の不満

1)「長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。

その私には子山羊一匹くださったことはありません。」(29 節)

父のもとで働いてきた兄の内心は、感謝はなく、実は不満でいっぱいだった。

2)「遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子」(30 節)

自分の弟であるのに、「このあなたの息子」と呼ぶ突き放した言い方、つめたさに兄の心情が現れる。

「私の弟」と思っていない。すなわち自分と弟とを切り離してしまっている。

② 父のことは「子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。」(31 節)

兄は父のもとにおり資産をすべて受け継ぎながら、その喜びや感謝がない。

あるのは義務感だけで、弟を非難する生き方はパリサイ人の偽善に通ずる。

③ 救いは、わたしたちの行う義のわざによってではなく、神のあわれみによることを聖書は語っている(エペソ

2:8-9/テトス 3:5)。

9月29日

「渴きをいやすもの」

士師記 15:14-20

武安 宏樹 牧師

サムソンもサムエルも同じ士師、ナジル人(=聖別された者の意)でした。ナジル人の禁忌は、①強い酒を断つ、②髪を剃らない、③死体に近づかない。サムソンの場合は以上3つを破って、神からの祝福を失う奔放な人生でした。桁外れに剛腕で、酒と女に弱く、破天荒な、力まかせの人物だと思われます。サウル同様に賜物は豊かでも、人格の実が整えられていなかった訳ですが、最終的には落ちぶれるサウルと逆に、髪の毛が伸びて浮上するサムソンとは、一体この相違は何だったのか。おそらく彼の深い部分に変化があったのです。

14章から読み進めると、戦いの後に凱歌はあっても、彼の言葉に「主が～」という賛美の声は見られません。しかし剛速球投手が技巧派に転向する如く、サムソンは連戦連勝だけでは、何か満たされない枯渴感を味わっていました。激戦と消耗の繰り返しでは、結局は心身共に疲れ切って病んでしまうのです。信仰生活も同様で、祈りに学びに奉仕に熱心だけでは届かぬ領域があります。もちろん熱心は見習うべきですが、度を過ぎると疲弊して脱落するからです。彼は凱歌の直後に武器を死体の山の上に投げ捨てます。意気揚々と思いきや、一等賞で解放感を得られると思いきや、枯渴感・恐怖感・焦燥感が消えない。どこまでも平安がない。そこで今まで受ける一方だった主の扉を叩きました。

「呼ばわる者の泉」から水を求める。己の力ではなく恵みの主を頼みとする。死の崖っ淵で彼は単純な霊的原則を見出します。休み、飲み食いすること。それは病人が活力を回復する基本です。彼は戦って何かを獲得する人生から、本質的に神に生かされている確信へ変わります。エリヤ同様です(Ⅰ列 19:)。人間に安息日・安息年・ヨベルの年、田畑も休みが必要。休みで回復を得ます。そして自分の肉の限界を悟って休むことで、新たに恵みの主と出会うのです。「疲れた者」「精力のない者」(イザ 40:29)は、もしかしたら私たちかもしれない。サムソンはこの後に失敗を経験しますが(16:)、祈りは変えられます(16:28)。結果として以前と違う形で、彼の命とひきかえに未曾有の勝利を得ました。彼もキリストの型でした。私たちは疲れてからではなく、泉で汲んでから、世の激しい戦いへ出たいもので、サマリヤの女の如く求めましょう(ヨハ 4:15)。

10月 日

「なんということを」

I サムエル 13:1-23

武安 宏樹 牧師

「なんということをしたのか」サウルの不従順にサムエルは怒りを現します。この言葉から、罪→没落という単純な方程式より視野を拡げたいと願います。サムエルは前章の最後で不気味な預言を残します(12:25)。どういう意味か。「あなたがたも、あなたがたの王も」とは、イスラエルの共同体としての性質を、物語ります。つまりサウルの失敗の数々は、彼一人に帰せられるべきでなく、士師時代に自己中心に形だけの悔い改めに終始しながら、王を求めてきた、民全体の罪の刈り取りなのです。サウルの没落の姿は、イスラエル全体が、分裂～捕囚～亡国の民へと没落していく姿の、前ぶれとも言えるでしょう。

ヨナタンの戦績により、必然的にペリシテと臨戦態勢に入るイスラエルは、敵陣の「海辺の砂のように多い民」と最新兵器を前に、早くも意気阻喪します。民は恐れおののき隠れる者や逃げる者も出始め、空中分解しかねない危機に瀕していました。頼みの綱のサムエルは約束の日になっても姿を現さない。サウルの焦りは最高潮に達します。若い彼に平安を求めるのは酷でしょう。極限状態の中でサムエルの約束を反芻しつつ(10:8)、「7日間」に固執します。約束の要点である「私があなたのなすべき事を教えます」は欠落していました。サウルは少々の遅刻や人心が離れても、目に見える状況より神との信頼関係に立つことが求められていましたが、自分で自分を守ってしまったのです。

結果的にサウルは王権剥奪まで宣告されます。何と厳しいことでしょうか。けれどもダビデが罪を犯した後に悔い改め、子の死という実を刈り取る一方、王権の繁栄は維持されたことから(IIサム 12:)、15章の記述は単なる繰り返しではなく、サウルの悔い改め不徹底が祟ったと言えるのではないのでしょうか。改革長老教会の有名な予定の教理を、カルヴァンは「恐るべき定め」とします。これに照らして私たちは機械的に、サウルを対角線上から断罪していないか。この「高度に神秘的な教理」について、「特別な配慮と注意をもって」扱うべきと、言われます(ウェストミンスター信仰告白 3:8)。サウルがイスラエル共同体の一員なら、私たちも主にある共同体の一員として、彼と同じ弱さを持っているはずです。だとしたら「なんということを」は、私たちにこそ語られるべき言葉なのです。

10月13日

「神の家を造ろう」

Iペテロ 2:3-5

山本 陽一郎 師

この箇所はキリストによって新しく生まれた教会に向けて書かれています。当時、石を積み上げて家を建てていました。

① キリストは「生ける石」

1)教会はいつくしみ深い主を味わっている

だから主のもとに来なさい。すなわち、神様を礼拝しましょうとペテロは言っています。

2)信頼できる土台

そして、ペテロは教会をキリストが土台となっていると言っています。土台がしっかりしていないと、その上にある建物はそれがどんなに立派であってもすぐに崩れてしまいます。もちろん私たちの土台についても同じことが言えます。土台が100%信頼できなければ、その上に建てられた私たちはぐらついてしまいます。

3)ペテロの記憶(マタイ 16:18)

ペテロが信仰告白した後に、イエス様に言われたことば「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます」、このイメージがペテロの人生を貫いていたのではないのでしょうか。信仰告白のあるところにイエス様は教会を建てて下さいます。

② 私たちも「生ける石」

1)ひとりひとりが大切な存在

イエス様が土台の石、そして私たち一人一人、生きた石として積み上げられていきます。その石は形も大きさも異なりますが、尊い存在です。

2)教会は共同体(エペソ 4:15-16)

神様が生ける石として一人一人をふさわしい場に置いて下さいます。一人一人は異なりますが、キリストによって結びつけられている共同体です。

3)あなたがた自身を築き上げなさい。

築き上げるとは家を造ることです。教会という建物を築き上げるために私たち自身を喜んで差し出すことです。

③ 神の美しい家をいっしょに造ろう

1)関係の中に生きる

私たちは交わりの中に生きています。

2)たいせつなこと

交わりが健やかなものになるにはその土台、すなわちイエス様を礼拝することによってひとつの石を積み上げられ、教会を建てあげていくことが大切です。

3)さあ、共に

イエス様が土台となり、イエス様が招いて下さり、イエス様が積み上げて下さった生ける石として、この美しい神の家に組み込まれているのです。そして宣べ伝えるためでもあります。

私たちはイエス・キリストに支えられ、生ける石として組み込まれ、証していくことができるのです。

10月20日

「勇気ある行動」

I サムエル 14:1-52

武安 宏樹 牧師

① ヨナタンの勇ましい信仰(1~23節)

ヨナタンが敵の要人の首を取ったことで(13:3)、ペリシテと開戦しました。サウルは兵力の差の不安に苛まれ、サムエルからの勝利の預言も忘れ(9:16)、不従順の罪を犯しましたが(13:9-14)、ヨナタンは兵力よりも単純な信仰で、斬り込みます。万軍の主と一つになり、下僕と一つになって、一致して戦う。霊的戦いを共にするための、麗しい一致を通して、呼び水の勝利を収めます。彼の戦い方は無謀に見えますがそんなことはない。いたって堅実な方策です。戦う前は主に期待し、最中は主に導かれ、結果は主におゆだねするからです。主と共に戦うことが勇気の源です。人間的弱さを考えたり、欲が出てきたり、結果を先取りしようとする、肌で主を感じるができなくなるのです。

② 一貫性のないサウル(24~46節)

本章前半は明るい勝利、後半は暗い内部の争いが、好対照で描かれます。サウルは結果的に勝利しますが、エポデ・断食・祭壇・ヨナタンの断罪など、その過程は優柔不断で信仰による一貫性が見られず、民は苦しめられます。「父はこの国を悩ませている」(29節)の、「悩ませる」とは「欺く」「愚かな誓い」の意味です。主イエスの禁じられた「偽りの誓い」(マタ5:33-37)の悪い例です。彼が不信仰かという点必ずしもそうでもありません。宗教的言動はしますが、迷信的&断罪的で「？」のつくことばかり。後付けのチグハグ感が拭えません。主の沈黙はヨナタンに關してではなく、サウルの一連の行動の否定ゆえです。

③ 勝利している暫しの間に(47~52節)

他人の中に欠点を探してはさばき、自分の正当性の為あらゆる工作をする。サウルの何とも暗い靈性は、主の祝福のみならず、人の祝福も遠ざけます。主を見上げずに人をさばいてばかりでは、自分も追いつめられていきます。代わって後々まで寄り添ったのは悪霊で、いたたまれない最期です(31:4)。とはいえ本章に限れば結末は、周囲の全ての敵と戦って勝利とありますから、暫しサウルに祝福は留まっています。初陣の謙虚さを想起する猶予なのか。私たちが備えられた悔い改めの時間があります。主の恵みをものにできるか。ヨナタンのように、本来的に信仰生活は私たちに将来と希望を与えるのです。

10月27日

「悔やまれる主」

I サムエル 15:1-35

武安 宏樹 牧師

本章はサウルが主の命令にどう対応して、どう御心を損なったか記します。アマレク戦は通常の侵略・防衛戦争と異なり、聖戦であったため特殊でした。「聖絶」が7回登場するように、相対的ではなく絶対的勝利が求められました。戦利品も取ってはならず、信仰による戦争ゆえ、全ての栄光は主に帰すこと。そもそもサウル治世と関係ない、出エジプト時代の反抗の復讐のためでした。

勝敗だけ見れば大勝であり、サウル王の威信はかつてなく高まりましたが、敵の最重要人物&家畜を聖絶しなかったのが、不従順と盗みの罪を犯します。100%を命じられたのに、99%捧げたので1%懐へというのは立派な罪です。捧げ物以前に心の内奥の霊的罪であり、記念碑を建てたことで偶像礼拝です。心ない捧げ物で「やるべきことはやりました」と豪語し、意気揚々と勝利宣言。己の罪意識を叩き潰すためだったのか。霊的空気の読めない王の有様でした。

サムエルは事ある毎に、「あなたは主に油を注がれた王」と励ましましたが、サウルは素直に受け止めずに、「小さい者」のセルフイメージに固執しました。間違った自己像に香を焚き、不安がつきまとい、人の歓心を求め続けます。いくら罪を指摘しても聞く耳を持たないサウルは、クビ宣告を突きつけられ、ようやく事態の深刻さに気づくも、この期に及んで「私の面目を」と懇願する始末で何も変わっておらず、彼は主のしもべとしては敗北者に終わりました。旧約のサウル、新約のイスカリオテユダ。彼らはなぜ選ばれたのでしょうか。彼らは自分の思いを握りしめ、御声よりも合理的方策を優先し墮落しました。人が求める者と神が求める者の違いを思います。いけにえ奉獻は象徴的です。アブラハムはひとり子イサクという、ありえないいけにえをささげ(創 22:)、神は御子という、もっとありえない最上のいけにえを、ささげられました。「悔いることがない」(29 節)それは主のご計画は変わることがないからです。「悔いる」(11 節)それはサウルを切った背後で、主の情深い柔軟な御心です。両者は一見矛盾するようで、実は一致します。私たちは聖霊に心柔らかく、悔い改めを導かれ、澄んだ心で悔いの無い神の永遠を仰ぎ見ます(II コリ 7:10)。

11月3日

「心を見る主」

I サムエル 16:1-23

武安 宏樹 牧師

サウルは依然として王ですが、主と共に歩もうとしなかったので棄てられ、サムエルは彼に三行半(みくだりはん)を突きつけますが、割り切れない思いは残りました。しかし主は「いつまで悲しんでいるのか」と尻を叩かれ、悲しみに留まるより、後向きな思いを断ち切って、なおもサムエルに次なる信仰の歩みを促します。そして彼は御声に応じて、後ろ髪引かれることなく一歩を踏み出しました。この過程こそサウルの残像から解放されて、新しい王を選ぶのに重要でした。

「人が見るようには見ない～人はうわべを見るが、主は心を見る」との御声は、長男に好感を抱いたサムエルには衝撃でした。そして慎重に見極めた結果、7人全てが違うと確信した時点で、彼の価値観は更新されていたようです。人間的に見れば消去法ですが、末っ子を待ちわびて彼の期待は高まります。現れた少年ダビデはサウルの外観と比べ、血色や目の輝きなど心の内側から、サムエルを霊的に魅了しました。素直で純真な心こそ、主の弟子の基準です。ではダビデの霊性が最初から全く整えられていたかということ、そうではない。サウルもダビデも罪人です(ロマ3:10-12)。ただ悔い改めの柔軟さの違いです。私たちが罪を犯してしまう弱さは、最初から主は織り込み済みです(詩51:)。ダビデのようにへりくだった心を主は求めます。加えてゴリヤテを倒すべく、羊飼いで養われた体力・精神力・統率力・愛情が、彼には備えられていました。使徒たちがそうだったように、ダビデも選びと愛に応える信仰がありました。

ダビデは栄え、サウルは転落。霊性の違いから、両者の明暗が分かります。私たちがサウルのように、自分を選んでくださった主の愛に不忠実ならば、主の支配からもれることはなくとも、温存する心の傷や恐れや憎しみを基に、悪霊の攻撃を受けることを知るべきです。サウルは家来が見ても明白なほど、精神的に破壊されていました。皮肉なことにサウルが愛して手放したくないほどの霊的な力を、ダビデは発揮します。いわば恵みのストロー効果です。サウルはダビデの引き立て役に回ることで、結果的に主の栄光が現されます。厳しいですが現実です。私たちの心を見られる主は、選びの責任を問います。この妥協無き主の選びをサムエルが代行したことで、最高の王が生まれます。

11月10日

「万軍の主の御名によって」

I サムエル 2:3-5

武安 宏樹 牧師

主から棄てられたサウルに代わり、ダビデが信仰によって手柄を立てます。ペリシテ人の代表戦士ゴリヤテは、全身武装した身長3肘にも迫る大巨人で、背格好の詳細な記述は、彼がいかに手強く勝ち目がないかを物語っています。一騎打ちは到底無理、束になっても難攻不落。イスラエル存亡の危機に瀕し、そういう緊急事態に民を鼓舞すべき王をはじめ、みな絶望感に苛まれます。彼らがなすべきことは、敵がどうであれ主に立ち返ることでした(イザ 30:15)。イスラエルは、主が「わたし」「あなた」と人格的に呼び合う特別な民族です。一騎打ちに際して、こちらには万軍の主が居られることを主張しなければ、大巨人に踏み潰されるような、弱い神を礼拝する民と認めるに等しいのです。

ダビデは兄たちの無理解と怒りによって、ゴリヤテ以前に孤独と戦います。彼にとっては四面楚歌の前哨戦の方が、さぞ苦労したのではないのでしょうか。けれども周囲の雰囲気には負けなかったのは、「この戦いは主の戦い」(47節)と本質を理解していたからです。大巨人と戦うのも突拍子もなく、羊飼いの日常生活で、主の御名によって勝利してきた証しに基づくものです。不思議なことに主は王の心を開かれ、若きダビデが代表戦士となりました。琴を弾いて王は霊的解放、ダビデは寵愛を受けた信頼関係が用いられました。とはいえサウルはサウルで、重装備を着せてダビデには余計なお世話でした。敵が自分の神々の名によってのろうのは、サタンと主の代理戦ということで、ダビデはそれしか頭になく、よって当然勝利するはずだと確信していました。

約束通りダビデは使い慣れた石投げと、たった一つの石で敵を倒しました。この一途な主への信仰は、サウルはじめ不信仰な民との違いは何でしょうか。私たちが日常生活で絶えず特別な武器を求めている愚かさ、対処するには大きすぎる自らの弱さや状況に対する絶望感への光を、見ることができます。それらが大巨人のごとく戦いを挑む時、私たちは信仰の石一個でよいのです。万軍の主は全ての巨人の中で最大の巨人であり、炎となって先を進みます。①主が居られること、②主が力をくださること、③主が勝利をされること。誰も周囲が理解しなくとも敵の恫喝も、ダビデのように恐れるに足りません。単純な信仰は日頃の主との交わりから生まれ、あらゆる局面に生かされます。

11月17日

「賛美の霊と恐れ」

I サムエル 18:1-30

武安 宏樹 牧師

サウルは凱旋したダビデを部下として重用しましたが(5節)、期待を裏切られる事件が勃発しました。それは祝勝歌を歌う女たちの歌詞の内容でした。それが王のプライドを傷つけ、怒りの矛先は女たちでなくダビデに向かった。不従順ゆえ王位が移動する預言が(15:26-28)、彼の中で符合したからです。人は大事なものに心を砕きますが、彼の場合はのし上がってきた意地でした。プライドや意地自体悪くありませんが、自分で握りしめ名誉欲にかられると、偶像礼拝者として負のエネルギーが、嫉妬や偽りの悪霊が足場を固めます。

かくてサウルは主に向けられなかった全身全霊を、悪魔に捧げる者となり、ダビデ殺害を決意しました。そのために自分の手を汚さずして緻密な計算で、婿をエサに前線へ送り込み戦死を期待しますが、ダビデは簡単にだまされず、それどころか要求を全て果たして連勝連勝。さらにサウルは恐れを抱きます。ダビデの表の戦いはペリシテ相手ですが、裏の戦いは陰湿なサウルおよび、背後で操る悪魔相手の霊的戦いです。ダビデは知恵と謙遜の限りを尽くして、どちらにも勝利します。主の御手が彼と共にあり、先立たれたからでした。

本章のもう一つの流れは、主を信じるダビデには味方が次々と与えられることです。ゴリヤテ戦では孤軍奮闘も、ヨナタンという無二の同志を得ます。「自分と同じほどに＝自分のいのちのように」。この「いのち」は「息」(創 2:7)と同じ原語だから隣人愛の究極です。さらに王の親族から妻ミカルを得ます。そして全ての民に愛され(16節)、神に愛される者は人にも愛される典型です。神を愛し人を愛するダビデの一途さに、周囲が応える明るい流れがあります。一方で王の親族まで味方につけられて、サウルはますます追い詰められます。にもかかわらず罪深い自分を制御できず、人心が離れる孤独感に苛まれます。本章では人間関係の背後に、悪魔の手と主の御手の2つの流れが交錯します。私たちは身分的には完全に主のものですが、性質は肉と霊とが相半ばします。罪深い心で霊的に暗くなっていたら、悔い改めによってチャンネル切り替え可能です。御霊の満たしを追い求める中で、肉の性質は征服されていきます。だから私たちは自己中心や律法的な思いを退け、御霊の自由を求めましょう。

11月24日

「御手の渦の中へ」

I サムエル 19:1-24

武安 宏樹 牧師

サウルとダビデの背後で、悪魔の手と主の御手が交錯する続きを見ます。直接手を下さずダビデを殺害しようとしたサウルの企ては、ことごとく失敗、ついに殺害命令を布告します。サウル陣営の兵力は圧倒的優位にありますが、ダビデはヨナタンとミカルという援軍を得て、全身全霊で受けて立ちます。

① ヨナタンの知恵ある戒め

王&父サウルに反旗を翻したヨナタンは己の身を顧みず、ダビデを擁護し、筋の通った説明と共に、父の情緒的な面に訴え、サウルは殺害を翻意します。成功の要因は冷静に、敬意をもって、柔らかい言葉で丁寧に語ったからです。御心から逸脱した人に何も言わなければ楽ですが、正すことはできません。彼の知恵ある説得から、コミュニケーションの大事さを学びます(箴 15:1-2)。

② ミカルの巧みな偽装工作

誓いまで立てたとはいえ心から悔い改めていない王は、再び蒸し返します。それはサウルの優柔不断以前に、「悪霊＝主からの悪い霊」(9節)の仕業です。ここから「追いかけてこ」が始まり、御手は両者を苦しめることとなりますが、ミカルの巧みな偽装工作は、ダビデの逃亡とサウルへの弁解に成功しました。自分でなく夫のための嘘は、御手の中で言葉の知恵として用いられました。

③ サムエル預言者団に伴う恐るべき臨在

御手の中であらゆる罫をクリアしていくダビデですが、休息が必要でした。とはいえサウルは地の果てまでも追いつけます。ダビデはサムエルのもとに身を寄せることを選択しました。もはや政治的権限のないサムエルでしたが、身の危険を顧みずダビデを匿(かくま)い、ダビデは彼と寝食を共にして力を得ます。けれども告げ口した者によってサウルに居場所が知られ、追い詰められます。ところが追う軍勢は、預言者団に現れた強烈な主の臨在にノックアウトされ、サウルは殺害計画も権力も威光を示す衣装まではぎとられ、裸にされます。主の御手はヨナタンやミカルへ間接的介入もさることながら、直接的介入で悪霊さえ操作して、最後は光の前におびき出すことでもろとも退治しました。私たちは聖書的&奇蹟的で多様な御手を、探求&体験する者となりましょう。

12月1日

「野原での友情確認」

I サムエル 20:1-42

武安 宏樹 牧師

① ヨナタンの約束(1～23節)

着実に援軍が与えられるダビデですが、相変わらず追われる苦しい状況で、ヨナタンとの友情は他人という一線を越えた、体の一部となっていました。身に覚えのないのにも関わらず、サウルの攻撃を受ける心労は耐えがたく、死を意識します。ダビデは人が相手ですが、ヨブは神が相手でした(ヨブ 3:). 悪霊の介在、友人の励ましも同様ですが、ヨナタンはより誠実な友人であり、彼が立場的にできることとして最大限の情報提供と、契約を結びます(23節)。

② サウルの怒り(24～34節)

新月祭の宴席にダビデがいないことを、当初サウルは配慮していましたが、理由を聞いた途端に取り乱し殺意が再燃します。ヨナタンは父をなだめるも、殺意が飛び火したことで、その本気度と「分からず屋」度に衝撃を受けます。それでも心酔したダビデと駆け落ちせず王の下に帰ったのは、なぜでしょう。真意は主の御手の中ですが、これ以上父を孤独に陥らせるのは得策でないと、思ったかもしれません。たとえ離れていても親友のために主が必要とされる場所で、主に仕え、王に仕え、苦難の道が待ち構える友の祝福を祈るのです。

③ ダビデの出発(35～42節)

ヨナタンが別れのサインとして、子どもの向こう側に矢を射る光景です。旅立つダビデと、送り出すヨナタンの互いの抑えていた感情が爆発しました。残留の一縷の望みも断ち切られたダビデは、それでも恨み節一つ遺しません。「三人で礼拝を」和解を夢見て奔走したヨナタンの願いは適いませんでした。私たちの共通した願い、それが客観的に最善に思えることであつたとしても、心の底からこのままであってほしいと思つても、時に適わぬことがあります。そのための一連の努力が不調に終わり、別れを余儀なくされると失望します。聖書の人間関係は愛とか信頼などの綺麗事ばかりとは限らず、御心に従って一歩踏み出すと、親子&師弟関係などに亀裂が生じたりもします(ルカ 12:51)。「安心して行きなさい。＝シャローム！」(36節)彼らはただ神の祝福を求めるその言葉しか見つからなかったのでしょうか。されど御国で再会の希望がある。同じ主を見上げながら、別々の道に。野原の友情確認は愛の出発点でした。

12月8日

「祈りのある生活」

ピリピ 4:6-7

富澤 誠治 師

祈りとは願い事を神様に知っていただくことです。

I. 祈りとの関係

1) 喜び・・・トラブルが起きると喜べない弱さがある中であっても、祈りによっていつも主にあって喜ぶことができます。

2) 寛容・・・赦すことは難しいことであり、また大きな課題であるが、祈りなくしての寛容はあり得ません。

3) 思い煩い・・・祈りによって私たちは平安をいただくことができます。

II 祈りは何か、それは神様に知っていただくこと、だからことばに表わして祈る必要があります。

III 祈りの結果

聖句のように「神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」

祈りのある生活とは

① 祈りは呼吸です。

「神である主は土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創2:7)

吐く息と吸う息の呼吸にたとえて理解されます。神様に訴えることが息を吐くこと、そして聖書を読み神様の語りかけを聞くことが息を吸うことです。

② 祈りは交わりです。

「私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」(Iヨハ 1:3)

交わりは聞いたり話したりすることで成立します。聖霊との交わりは神様との交わりでもあります。そしてそれは聖書を読んで応答することです。まさに神様とのキャッチボールと同じです。

③ 祈りは近づいてゆくことです。

「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に 近づこうではありませんか。」(ヘブ 4:16)

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には 報い
てくださる方であることを、信じなければならないのです。」(ヘブ 11:6)

イエス様を信じて受け入れ、また悔い改めた私たちは遠慮することなく、神様に近づくことができます。

④祈りはお言葉をいただく生活です。

サムエルは「主よ、お語り下さい。しもべは聞いています。」とのことばによって偉大な預言者として選ばれました。

また、百人隊長も「主よ、おことばを下さい。それで充分です。」とのことば
によっていやしがなされました。

そしてあの偉大なモーセの神様との関係も忘れてはいけません。常に神
様との応答の関係が保たれていました。

私たちは生活の中において神様からの応答によって大きな祝福を得るこ
とができるのです。



12月15日

「狂人ダビデ」

I サムエル 21:1-15

武安 宏樹 牧師

① 偽るダビデ(1～9節)

親友ヨナタンを後にしたダビデは、食糧も武器もなく避難場所を求めます。アヒメレクはサウル側の祭司でしたが、ダビデはもっともらしい言い訳をし、祭司も鵜呑みにしたのか、嘘と気づくも信仰的判断のゆえか、彼を受け入れ、聖所の下がりもののパンを祭司でもないのに差し出すという、掟破りを行い、結果アヒメレクは他の祭司たちともども、死刑の憂き目に遭います(22:)。けれども主イエスはこの祭司の英断を御心に適うものと称賛します(マタ 12:)。アヒメレクは単に騙されたのではなく、深いところで主のあわれみを選んだ。それも自分の命をいけにえとして、サウル王以上に主を恐れて捧げました。彼の流された血の上に生きることで、ダビデはどれほど励まされたことか。私たちは主に従う過程で、社会的通念として人に迷惑をかけないようにと、思いとどまることがあります。そうでなく信仰的判断が求められています。なぜなら私たちは贖い主キリストに返すべき負債を負っています(ロマ 1:14)。

② 狂うダビデ(10～15節)

次に目指したのは約 50 km離れたペリシテ人の領地で、身分を隠しましたが、それはあまりに楽観的で、次の王としてダビデの名声は知れ渡っていました。アキシュに素性がばれたら命はありません。一刻も早く逃げるため策を練り、機転をきかせて狂人を演じきり、結果的に王から無事追放の命を受けました。孤独な逃亡生活で、身分も明かせず、偽って生きるのが楽しい訳ありません。神に棄てられたかのような苦しみと貧しさ、死の恐怖がダビデを囲みます。極限状態にあって捨て鉢にならず、演じつづけた秘訣は詩 34 篇にあります。「あらゆる時」とは以上の屈辱的な逃亡生活の苦悩も含めて、主をほめたたえ、この信仰ゆえに、臨機応変 & 変貌自在にダビデは自分を変えてきたのです。変わる自分、されど変わらぬ御手。不平を言わず、苦しみに意味を見出す。34 篇には畳みかけるように救いの確信が繰り返されます。もう一つの意味。それは「彼ら＝貧しい者」のために道を開くことで、早くも 22 章で加わります。「狂人」とは平気で偽る精神異常よりも、主の霊に捕らえられて人間的常識を覆していく超越した信仰者として見習いたいのです。王就任後に契約の箱を運び上った際に、力の限り踊りまくる姿にそれが証されています(II サム 6:)。

12月22日

「安全地帯」

I サムエル 221-23

武安 宏樹 牧師

噂を聞きつけてダビデの家族や彼を慕う不遇な者が、ほら穴に集結します。希望の中身としては主の臨在を求め
る者や、政治的な求めもあったでしょう。「ご自身の栄光と公共の益のため」(ウェストミンスター信仰告白 23:1)と為
政者の務めがあるように、主から委ねられた彼らを門前払いせず、彼らの長となりました。けれども預言者ガドは、
そこに留まらずに危険なユダへ帰るように示します。

情報を得たサウルは 400 人の手下を従えたダビデ軍の規模に、嫉妬します。ダビデが信仰と人望で磁石のように
人を集めるのに、サウルは権力でしか、人が集まらなと気づいています。『だれも私のことを思って心を痛めな
い。』この言葉を笑えるでしょうか。私たちの内心に横たわっていないでしょうか。サウルのように主を見上げないと、
心が暗く・狭く・主観的に陥っていきます。ダビデのように主を見上げれば、心は明るく・広く・謙遜さが与えられま
す。サウルに理解者がいないのは、心の空間の狭さゆえ収容できないからでした。

善意で与えた祭司アヒメレクは、伏兵ドエグの密告により謀反と断定され、他の祭司一族と共に皆殺しにされます。
サウルの孤独と罪深さの馴れの果て。ダビデをアヒメレクを他の祭司たちを、何よりもはや主を彼は敵視しました。
かつてアマレクで妥協した聖絶を(15:)、祭司一族に行ってしまったのです。あのとき建てた記念碑は自分の栄光
のためでしたが、あれよあれよと肥大化。まことに罪とは恐ろしいもので、悔改めの不徹底は必ず後に牙を剥きま
す。掟破りの「逆聖絶」は皮肉なことに、主の御手の中でエブヤタルを生かします。ダビデは父の死を謝罪し、エブ
ヤタルは祭司として終生ダビデに仕えます。『安全』との確信は、以前は変貌自在に逃げていたダビデが小細工を
悔改め、アヒメレクの遺子との邂逅で与えられました。追いつづけてきた安全地帯は、もっと近くに、自分の内に存
在すると悟ることで、広く強固にされました。死の陰の谷を歩くことがあっても、主が共に居られれば大丈夫と確信
すれば、多くの民が住むことができます。政治家の成功、いやキリスト者の祝福とは、心の内奥の「安全地帯」の
持ちようで、天と地ほどの差がつくのです(箴 1:33)。

12月29日

「仕切りの岩」

I サムエル 231-29

武安 宏樹 牧師

「私といれば安全」(22:23)とダビデが断言したのは、嘘をついた訳でも、大風呂敷を広げた訳でもなく、小細工せずとも主が共に居られると知って、安全の確信を得たのでしょうか、実際は相変らず危険極まりない崖っ淵です。主は「安全」の意味を身をもって教えるために、簡単に安全を与えはしません。

前からペリシテ軍、背後からサウル。両面に対応するのは大変なことです。かといって愛国心は人一倍のダビデなので、穴に隠れるのは堪えられません。板挟み状態の中で、攻撃の報を聞かば祈り、部下が難色を示せばまた祈る。危険で不安だから御言葉が示されなければ動かない。主からのGOサインで、ペリシテ軍には御言葉通りに大勝利を収めました。彼らが前線に出て来て、シメシメなのがサウルです。何とか鉢合わせにならぬようダビデは願うも、「下って来る」「引き渡す」と、主はさらに不安な状況へと駆り立てるのでした。

ダビデは絶えず恐れっぱなしです。このことから自分の手に負いきれない大きな試練が迫るときは、恐れ感情が出てくるのは自然なことと言えます。強心臓を養えというのではない。主イエスも十字架の前に恐れます(マコ14:)。ただ恐れるだけで終わらずに、たえず小出しでよいから祈りの呼吸が大事です。祈り続けると思いもよらぬところから助けが来て、御手に目が開かれます。ここでヨナタンの来訪と預言という、感謝感激の想定外の恵みが与えられ、励ましだけでなく将来の展望まで、祈りの答が意外な形で与えられました。

両軍は追いつ追われつ必死でしたが、あと一歩で捕らえることができない。天から御手が制御していたからです。すんでのところサウルは断念します。「仕切りの岩」で初めて仕切られたのではなく、最初から仕切られていました。物理的に追いつかないだけでなく、次章で鉢合わせになるも奇跡が起きます。こんなことになると誰が想像できるでしょうか。主は安全を安売りしません。ダビデは後になって絶えず守りの御手が注がれていたことに、気づくのです。詩120篇は苦しみの中から、詩121篇は不安の中から、主に呼びかけます。その答は主が必ず守ってくださること。1年間の主の守りを感謝しましょう。